

# 明星大学蔵絵入り和本の基礎的研究と WEB 公開、教育実践への応用

明星大学平成 22 年度  
特別研究費（共同研究助成費）研究成果報告書

平成 23 年 3 月 2 日

柴田雅生・山本陽子  
勝又 基・矢吹道郎



## 目 次

明星大学平成 22 年度特別研究費 ( 共同研究助成費 ) 「明星大学蔵絵入り和本の基礎的研究と WEB 公開、教育実践への応用」について ……	5
『絵本・絵巻の世界』のWEB公開について	矢吹道郎 …… 7
明星大学蔵『一目玉鉦』WEB公開に伴う 解説・コラム・翻刻について	勝又 基 …… 15
明星大学本『ふんしやう』絵巻の挿絵について	山本陽子 …… 26
明星大学本『新曲』の挿絵について	山本陽子 …… 30
明星大学本『ふんしやう』『新曲』について	柴田雅生 …… 34
明星大学本『徒然草』挿絵について	山本陽子 …… 44
明星大学本『徒然草』とその教育実践への応用をめぐって	柴田雅生 …… 52
カラーページ『ふんしやう』図版	
カラーページ『一目玉鉦』・『新曲』図版	
カラーページ『徒然草』図版	
カラーページ『トップページ』図版	

## メンバー（所属・読み）

柴田雅生（人文学部日本文化学科）	しばた まさお
山本陽子（人文学部全学共通教育）	やまもと ようこ
勝又 基（人文学部日本文化学科）	かつまた もと
矢吹道郎（情報学部情報学科）	やぶき みちろう

# 明星大学平成 22 年度特別研究費(共同研究助成費)

## 「明星大学蔵絵入り和本の基礎的研究と WEB 公開、 教育実践への応用」について

柴田 雅生・山本 陽子・勝又 基・矢吹道郎

### はじめに

明星大学には、近世の絵入り本や絵巻が所蔵されている。絵巻といえば平安時代末から鎌倉時代の作品が有名だが、その後も近世まで、特に室町末期から江戸前期にかけて、素朴なものから大名家の嫁入道具として作られた高価なものまで、多様な絵巻や絵本が作られてきた。

それらの一部は近年、奈良絵本・絵巻と呼ばれて注目されつつあり、いくつかの作品の写真図版が出版されているが、まだ挿絵や部分的な掲載のみに限られている。また展覧会においても、絵巻・絵本という形態ゆえに、個々の作品の全容を見ることは困難である。

そこで明星大学では、所蔵する絵本・絵巻の全場面を撮影して WEB 公開する企画を、明星大学図書館貴重書デジタル保存プロジェクト(『平家物語』第四巻まで)、平成 19・20 年度科学研究費補助金「物語絵画における武士 - 表現の比較研究と作例のデータベース化」(『平家物語』残り分・『北野通夜物語』・『十番切』)、明星大学平成 20 年度特別研究費「明星大学蔵絵入り和本の基礎的研究」(『ふんしやう』・『新曲』)として継続してきた。

### 1. 研究目的

本課題の最大目的は、明星大学の公開データベース「奈良絵本・絵巻の世界—武士の物語絵巻をよむ—」の、拡大と充実である。

このデータベースは、明星大学が所蔵する、奈良絵本と呼ばれる江戸時代の『平家物語』絵本、『十番切』絵巻、『北野通夜物語』絵巻、『文正草子』絵巻、『新曲』絵本の挿絵と詞書を含む全写真画像のそれぞれに、書誌・作品解説・全釈文・用語解説・全挿絵解説・挿絵コラムを付したもので、平成 20 年秋より学内外に向けて公開された。

しかし学内には、未公開の挿絵入り和本がまだ残されている。そこで今回は、『徒然草』絵本と絵入り版本『一目玉鉾』を撮影し、書誌・作品解説・全釈文・用語解説・挿絵解説・挿絵コラムを付し、データベースに加えた上で、「絵本・絵巻の世界」と名称を変更して WEB 公開することを計画した。

同時に、各本について研究した考察を報告書として出版する一方、これらの撮影データや釈文・解説を、WEB 公開の過程やその成果を通じて、大学等の教育実践にも役立てることを志した。

## 2. 研究方法・分担

まず、明星大学蔵挿絵入り和本『徒然草』絵本と『一目玉鉾』の、詞書と挿絵を含めた全頁の図版写真を撮り、これを基礎データとした。撮影は丸善株式会社(写真撮影)・株式会社堀内カラー(写真撮影、デジタル処理)に委託した。

(以下、矢吹) 納入された両本のデジタル画像を用いてデータベースを構築し、明星大学図書館と協力し、WEBによる公開に追加した。WEBの公開にあたり、デジタル画像の効果的、且つ適切な提示方法を柴田・山本・勝又と共に考察し、「絵本・絵巻の世界」と名称を変更して新たなWEBページを作成した。

(以下、柴田) 『徒然草』の本文について、原本調査および撮影された画像をもとに、絵入り和本の基本書誌を把握し、本文の系統を検討した。続いて、小学校から高校の古典教育における絵入り本の活用方法を検討した。

(以下、山本) 『徒然草』の挿絵について、近世初期などの画像を収集・整理し、比較検討を行った。同時にその挿絵について考察した。授業においては平成23年度以降に、画像の活用を試みる予定である(写真図版の展示・解説の作成などを実践)。

(以下、勝又) 『一目玉鉾』について、原本調査および撮影された画像をもとに、絵入り和本の基本書誌を把握し、本文の系統を検討した。また、江戸時代における絵入り和本の文化史的意義について考究した。

## 3. 研究成果・公開について

課題の成果としては、まずWEB公開が挙げられる。『徒然草』絵本と『一目玉鉾』の詞書と挿絵を含めた全頁の図版写真に、『徒然草』は解説・書誌・釈文・図版解説・コラムを、『一目玉鉾』は解説・書誌・釈文・コラムを附し、報告書のPDF版とともに、公開データベース「奈良絵本・絵巻の世界—武士の物語絵巻をよむ—」の5本に追加し、全体の名称を「絵本・絵巻の世界」と変更して平成23年4月または5月よりWEB公開を行う予定である。

研究成果の抜粋は、柴田・山本・勝又・矢吹の四名による分担執筆の「共同研究報告 明星大学蔵絵入り和本の基礎的研究とWEB公開、教育実践への応用」として、『明星大学研究紀要』「人文学部・日本文化学科」第1号に掲載され、平成23年3月に刊行される予定である。

また、研究成果の全容は、各メンバーが本報告書、『明星大学平成22年度特別研究費(共同研究助成費)「明星大学蔵絵入り和本の基礎的研究とWEB公開、教育実践への応用」』に、参考図版とともに掲載し、平成23年3月に刊行する予定である。

## 附記

また、明星大学所蔵の『ふんしゃう』絵巻・絵入り本『新曲』についても、明星大学平成20年度特別研究費(共同研究助成費、研究課題「明星大学蔵絵入り和本の基礎的研究」)を得て撮影し、すでにホームページに全図版写真を公開して書誌・釈文・解説、図版解説を附しているが、活字媒体によっても紹介を行いたく、両者の図版の一部と解説・書誌、挿絵解説と考察を、併せて本報告書に掲載する。

# 『絵本・絵巻の世界』のWEB公開について

情報学部 矢吹道郎

## 1 本研究の背景について

明星大学図書館所蔵の貴重書のWEB公開は、2002年より世界的に見ても高い価値を持つシェイクスピアの初版本～第4版、及び、同時代のベンジョンソンの戯曲集を『Shakespeare Collection Database』として、

<http://shakes.meisei-u.ac.jp/>

に公開したのに始まり、『奈良絵本・絵巻の世界～武士の物語絵巻をよむ～』

<http://ehon-emaki.meisei-u.ac.jp/>

米国の鳥類学者 John James Audubon による米国鳥類図鑑『Birds Of America』

<http://BirdsOfAmerica.meisei-u.ac.jp/>

と続いてきている。

これは、文化的に価値ある貴重書を、劣化防止及び保安の観点の問題を気にせず、より多くの利用者に利用して貰い、大学として文化的な貢献を行っていくことを目的としている。

本研究は新たに本学所蔵の「徒然草」「一目玉鉾」の研究成果と貴重書そのものを広く一般に公開することを目的として始まった。

## 2 貴重書公開WEBの意味と目的

Webにおける公開には、当然ながらデジタル画像が必要となる。現状のインターネットとWebでは、回線速度の限界から、高解像度のデジタル画像は望まれない。しかし、高解像度の画像を作成し、経年変化、劣化が進むであろう貴重書のデジタル保存を行うことにも大きな意味がある。当然ながら、Shakespeare Collection Databaseにおいても、高解像度のデジタル画像を作成し、未来への遺産とすべく保存を行っている。

前研究の成果である『奈良絵本・絵巻の世界～武士の物語絵巻をよむ～』のWeb公開もまたいくつかの意味を持っている。すなわち、

### 1. 学術的

- 研究成果の発表
- 研究等における貴重書の活用

### 2. 文化的

- 貴重書のデジタル保存
- 多くの人に楽しんで貰う

の意味がある。

もしも単なる「貴重書図書館」であり、研究成果発表であるならば、画像とともに研究成果をWeb化し公開されていけば良い。しかしながら、研究目的での活用を目的とするならば、「どのような機能を持つべきか」を考慮する必要がある。さらに、一般の利用者をも目的とするのであれば、使いやすく、かつ、楽しんで閲覧できるものでなければならない。

貴重書のデジタル保存については、本研究においてはさらに重要である。一般にこれらの古書である絵本絵巻等は、「広げる」と言う作業が、「傷める」につながり、さらに紫外線による色の劣化もあり、美術館等で一般に実物が公開される場合でも、ごく限られた一部が公開されるにすぎず、全体を見渡したり、全体を「読む」ということは、困難である。たとえ研究者であっても細心の注意が必要となる。本研究のための写真撮影も、専門家による細心の注意のもとに行われた。

過去においては、この問題を解決するために、復刻本、あるいはコピー本の作成が行われる場合があったが、たとえ作成されても非常に高価なものとなり、一般の利用者が楽しむものとはならない。

### 3 絵本絵巻の公開

本研究は、2008年11月19日より、URL

<http://ehon-emaki.meisei-u.ac.jp/>

に於いて公開されている『奈良絵本・絵巻の世界～武士の物語絵巻をよむ～』に「徒然草」「一目玉鉾」のデータを追加することで実現することとした。この理由は、

- 既に URL が知られており、新たな URL を周知する必要がないこと。
- 奈良絵本の「奈良」の意味が曖昧であり、将来を見据えてその単語 (nara) を URL には含めていないこと。
- 「徒然草」「一目玉鉾」を含める事で全体としての統一性が崩される事がないこと。
- 「奈良」の文字を取り払う事以外、大きなデザイン上の変更を必要としないこと。

が挙げられる。

結果として、トップページのタイトルを『奈良絵本・絵巻の世界～武士の物語絵巻をよむ～』から、『絵本・絵巻の世界』に変更し(全体として武士とは関係なくなるため、サブタイトルの「～武士の物語絵巻をよむ～」は削除した)、「徒然草」「一目玉鉾」のデータを追加し、トップページに追加された絵本へのアイコンを追加することとした。

### 4 画像データ

保存されている Web 上の画像データの情報は『奈良絵本・絵巻』の世界と変わりはなく、JPEG 形式で保存されているおり、サイズは、Thumbnail, Small, Medium, Large の 4 種類が用意されている。新たに追加された、公開画像 4 種類とデジタル保存のための画像 (TIFF 形式、非公開) の個別のおよそのデータ量を表 1 に示す。以前のデータより画像がシンプルなため、多少小さくなっているが、大きな違いはない。

表 1: 個別の画像データのデータ量

Thumbnail	約 33KB
Small	40KB～50KB
Medium	80KB～140KB
Large	200KB～300KB
保存画像	およそ 67MB

「徒然草」「一目玉鉦」のデータを追加した結果、本ホームページ全体ではおよそ1.2GBの情報量となっており、Web公開をしていないデジタル保存のための高解像度画像を含めると、全体で11GBほどになる。

## 5 WEBページの概要

現状(2011年3月現在)は、正式公開の前の実験サイトの状態であり、構築確認のために

<http://160.194.128.40/>

に於いて閲覧可能である。

実験サイトのトップページは、『「絵本・絵巻の世界」トップページ』(巻末カラー図版参照)となっている。トップページからは、各絵本、絵巻のページへと進んで行くことが可能である。

現在のところ、

- 平家物語 (絵本)
- 北野通夜物語 (絵巻)
- 十番切 (絵巻)
- 文正草子 (絵巻)
- 新曲 (絵本)
- 徒然草 (絵本)
- 一目玉鉦 (絵本)

の7つの絵本、絵巻が閲覧可能となっている。

今回の研究の成果の「徒然草」と「一目玉鉦」のトップページは、それぞれ、『「徒然草」トップページ』と『「一目玉鉦」トップページ』(巻末カラー図版参照)となっている。

## 6 機能

### 6.1 現状の機能

現状(2011年3月時点)で備えられている機能は、

- 画像の一覧からの個別頁の選択
- 挿絵の一覧
- 個別頁の画像サイズを選択
- 頁の移動(ページをめくる機能)

である。これらはこれまでに公開されている、平家物語、北野通夜物語、十番切、文正草子、新曲の機能との差はないが、以下に概要を述べる。



図 1: 頁が選択された様子

### 6.1.1 画像の一覧からの個別頁の選択

それぞれのトップページ『「徒然草」トップページ』、『「一目玉鉾」トップページ』(巻末カラー図版参照) から [画像検索と翻刻] をクリックすると、画像検索と翻刻のページに移動する。画像検索と翻刻のページでは、まず冊 (徒然草) あるいは、巻 (一目玉鉾)



を選択し、全頁一覧



をクリックする。これにより、サムネールによる一覧が表示されるので、希望の画像 (頁) をクリックすることにより、個別頁が選択される。

個別頁が選択された様子を図 1 に示す。

なお、図 1 は挿絵のある頁が選択されているが、図に示されるように、挿絵にはキャプションがつけられている。挿絵を理解し楽しむための配慮である。

### 6.1.2 挿絵の一覧

徒然草では、トップページ(『カラー図版:「徒然草」トップページ』参照)から[挿絵一覧]をクリックすると、挿絵の一覧が表示され、サムネイルをクリックすることにより、拡大画像が表示される。「徒然草」では挿絵が少ない(上冊、下冊合わせて13図)ため、上冊下冊合わせて一画面で表示される。明星所蔵徒然草の挿絵の全体的なイメージを掴むためのものである。

「一目玉銚」は全図が画像と文章であるため、挿絵一覧の機能はない。

### 6.1.3 個別頁の画像サイズを選択

インターネットの回線速度が高くなったとはいえ、いかなる場合にも十分な速度を持つとは言えない。単に画像の構図を調べたい場合など、精密な画像を必要としない場合や、回線が混雑していて、画像の大きさよりも迅速さを優先したい場合などがある。

本データベースの閲覧用画像としては、基本的に Small, Medium, Large の3つの大きさをすべての画像に対して用意した。これらは図1の画像の下にある、Small, Medium, Large をクリックすることで選択される。

それぞれのサイズは、表1に示した通りである。これらの大きさは、現在の一般的なインターネットの通信速度を前提として、Small はある程度輻湊が生じている場合でも大きな時間を要しない、Large は回線利用率が低い場合であれば大きな時間を要しない、Medium はその中間、として決定された。

### 6.1.4 頁の移動(ページをめくる機能)

連続的に画像を追って見ていく場合のために、前後への画像の移動の機能を持たせている。頁の移動は図1の画像の下にある、←NextPage、PrevPage→をクリックすることで行われる。

図1からは分からないが、「頁をめくる」感覚を実現するために、それぞれの画像の左半分、右半分をクリックすることにより、←NextPage、PrevPage→をクリックした場合と同じく、頁の移動が可能となっている。

## 6.2 今後追加する機能

2011年3月末までには以下の機能

- 翻刻と漢字かな交じり表記
- 地名からの画像検索(一目玉銚)

を追加する予定である。以下に概要を述べる。

### 6.2.1 翻刻と漢字かな交じり表記

古典文学としての側面からは翻刻あるいは漢字かな交じり表記の機能が欠かせない。本データベースは単に「見る」だけのものではなく、「利用するもの」という観点から、すべてのテキスト部分に対して、翻刻と漢字かな交じり表記を付加してきている。翻刻と漢字かな交じり表記のためのデータは研究メンバの研究の結果を反映するものである。

翻刻と漢字かな交じり表記を表示させるには、文章の頁の画像の下に現れる

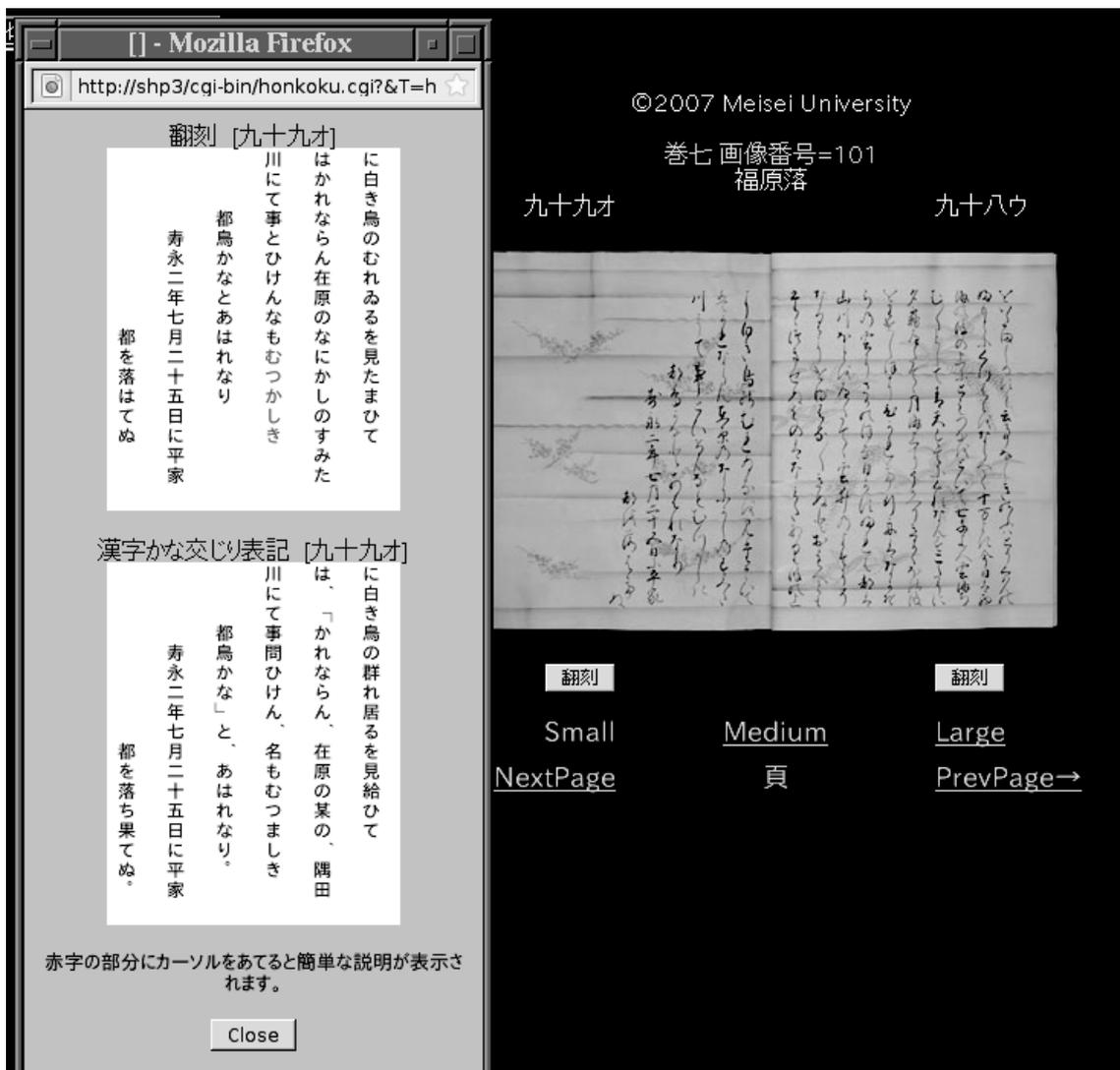


図 2: 翻刻と漢字かな交じり表記 (平家物語の例)



をクリックする。「平家物語」の翻刻と漢字かな交じり表記表示の様子を図 2 に示す。

今回追加された「徒然草」については翻刻と漢字かな交じり表記を、「一目玉鉾」については漢字かな交じり表記は必要ないと考え、翻刻のみを画像とともに表示するようにする。

### 6.2.2 地名からの画像検索

「一目玉鉾」は地誌であることから (当時の) 多くの地名が現れる。このため地名から頁画像を検索できることが望ましい。そこで「平家物語」の『人名地名挿絵検索』と同様な『地名検索』の機能を持たせる予定である。

なお、「徒然草」についてどのような検索機能があるべきかについては、現在検討中であり、未定である。

## 7 アクセス統計

『奈良絵本・絵巻の世界』の URL である

<http://ehon-emaki.meisei-u.ac.jp/>

に対する 2008 年 11 月から 2011 年 1 月までのアクセス統計を表 2 に示す。(Web のサーバのログ解析プログラム Analog によるページ要求の集計結果である。2008 年と 2011 年は計測期間が短いため、当然ながら、アクセス数は少ない。)

表 2: アクセス統計

年	アクセス数
2008 年	44301
2009 年	217241
2010 年	310620
2011 年	17085

個別のアクセスでは「平家物語」のアクセスが一番多く、「十番切」「文正草子」「北野通夜物語」「新曲」と続いている。今後「徒然草」「一目玉鉾」が加わることにより、全体としての完成度が高まり、さらなるアクセスが期待される。

これまでの WEB 公開の成果として、問い合わせの結果具体的な貢献につながった事例を表 3 に示す。

表 3: 問い合わせとその結果

時期	相手先	内容
2008年12月	東京大学史料編纂所	当サイトへのリンク
2009年3月	国立国会図書館	データベース・ナビゲーション・サービス (Dnavi) からの当サイトへのリンク
2009年5月	NHK エデュケーショナル	NHK 教育テレビ「見える歴史」の関連情報としての当サイトへのリンク
2009年9月	学習院大学大学院人文科学研究科博士前期課程卒業の個人研究者	個人ブログから当サイトへのリンク
2010年8月	小学生	夏休みの自由研究のための画像の掲載 (微笑ましい問い合わせ)
2010年9月	株式会社 少年写真新聞社	画像その他の情報の新聞への掲載
2010年10月	下関市立内日中学校	文化祭での画像の利用
2010年10~12月	山梨県立博物館	開館5周年記念特別展「甲斐源氏 - 列島を駆ける武士団」での明星大学本「平家物語」の展示

## 8 まとめ

本サイトは、合計7つの絵本・絵巻を部分的ではなく、すべてを閲覧できるホームページとなった。

現状で、本ホームページは貴重書を公開するという文化的な意味を持ち、研究成果の公表であり、さらなる研究のための利用も可能であり、さらに、一般の利用者が楽しめる価値あるホームページとなっていると考えている。

今回の2点の作品の機能が完成すれば、『絵本・絵巻の世界』としてのホームページは完成となる。正式公開は2011年4月あるいは5月を予定している。

# 明星大学蔵『一目玉鉾』WEB公開に伴う

## 解説・コラム・翻刻について

勝又 基

### 1 はじめに

明星大学 Web サイト「絵本・絵巻の世界」では、すでに『平家物語』『北野通夜物語』『十番切』『文正草子』『新曲』の5作が公開されている。それに続いて今年度『徒然草』『一目玉鉾』の2作が公開され、『一目玉鉾』の解説・コラムを担当することになった。

ページ全体の統一を図るため、作成にあたっては基本的に先行公開作の形式・方針を踏襲した。具体的な内容については下記の通りである。

### 2 解題

【作品】【作者】【書誌】の3項に分けて述べた。

このうち【作品】【作者】は簡略を旨とし、通説を中心にまとめた。いっぽう【書誌】は、明星大学所蔵本についての個別的事柄を中心にまとめた。

以下に【書誌】の節のみ転載しておく。

明星大学蔵本の書誌事項について簡単に述べておく。

四巻四冊。縦 26.0 cm×横 18.2 cm。刊記は「元禄貳年己年正月吉日／大坂高麗橋心斎橋筋南入町／雁金屋庄左衛門板」。他所蔵機関の本には書肆（＝本屋）名を削除したもの、享保三年（1718）の刊記を持つものなどが存するが、明星大学本は元々の刊記を持つ初印本に近い一本と言って良い。

表紙は最初からついていたもの（原装）だが、題簽（題名などを表紙に貼り付ける紙片）は、カラーコピーか何かで後から補われたものである。

『一目玉鉾』の早く刷られた本には、巻四に丁付（頁番号のようなもの）に乱れがある。具体的に言えば、「赤坂」ではじまって「鷺乃松」で終わる丁と、「志賀の嶋」ではじまり「三池」で終わる丁との両方に、丁付が「十六丁」と記されているのである。

上段の文章や下段の地図のつながりで考えれば、十四丁、十六丁（「赤坂」で始まる）、十五丁、十六丁（「志賀の嶋」ではじまる）、十七丁、とするのが正しい。明星大学本はその通りの配列となっている。諸本によっては並び順の異なるものも存するが、いずれが早く印刷されたかは明らかでない。

印刷状態、保存状態は悪くない。後人による朱書入れがある。

### 2 解題

本研究プロジェクトは絵本・絵巻についてのものであり、先んじて公開されている資料に付されたコラムも挿絵に関する言及がほとんどである。よってこの『一目玉鉾』に関する

るコラムの対象も、挿絵を中心とした。

執筆に際しては、ホームページに掲載するコラムであるという性質を考慮した。すなわち学問上の発見よりも、わかりやすさを重視しての執筆を心がけた。『一目玉鉾』は道中記的な地誌であるため、描かれた絵に特色を見出しにくい点もあった。よって中には挿絵から離れたコラムもある。

コラムは計6作書いた。『一目玉鉾』は全4巻であるが、その各巻の一つはコラムを作成することとした。

このような方針のもとに成ったコラムは下記の通りである。

【1】平安の昔をしのぶ ――宮城野（巻一・十丁ウ）



『一目玉鉾』には人物が数多く描き込まれている。旅人や侍、漁師などさまざまであるが、基本的には江戸時代の人物が描かれているようである。そんな中、この「宮城野」の箇所だけはやや事情が異なるようだ。草深い野原に、烏帽子に水干の貴族が描かれ、傍らには長い箱状のものが二つ置かれている。上段の説明を読むと次のように記されている。

此野の糸萩（いとはぎ）、花房（ぶさ）も余（よ）の所にかはりて、むかしは爰に錦（にしき）を乱（みだ）し、都人の目にもめづらしく、為仲（ためなか）手折せて長櫃（ながびつ）に入れてかへられし。其跡（あと）もかたちも、今は一本（もと）も見へず。広（ひろ）野に小松ばかりありて、秋をしらず。此花の種（たね）元は枯（かれ）て世に残り、仙台（せんだい）の人の庭に咲（さか）せし。

昔この地は萩が咲き乱れていた。その様子が都人には珍しく見え、為仲という人が手折って長櫃（ながびつ）に入れて持ち帰った、と書かれている。『定本西鶴全集』の注にもあるように、源為仲は平安末期の歌人で、逸話は『無名抄』下巻にあるもの。陸奥の守の任を終えて都に帰る際、この萩をめでて長櫃十二棹（！）に入れて持ち帰ったというのであ

る。

続けて『一目玉鉾』は、宮城野は今その跡形もなく、野には小松ばかりが生えているとしている。この箇所に限っては江戸時代の様子ではなく、平安時代の昔をしのんだ挿絵が描き込まれているのであった。

## 【2】空海と蛇骨堂 ——日和田（巻一・十七丁表）



挿絵を見ると、「日和田」のすぐ脇に「ほねくはんをん（骨観音）」と記され、お堂らしき絵が描かれている。その説明はこうだ。

むかし爰に永代淵とて、青竜（せいりう）の住て、人をなやましける。弘法（こうほう）大師（し）戒（いまし）め給ひ、其蛇骨（じやくつ）にて観音を作り給ふ。永代淵なる所に龍が住んでいて人々を苦しめていた。それを弘法大師すなわち空海がこらしめ、その骨で観音像を作った、というのである。

蛇骨堂は今も存するが、今に伝えられる伝説は、空海のものではない。簡単に言えば蛇に変じた松浦佐世姫の骨で彫刻した、というものである。この佐世姫伝説は少なくとも江戸時代中期には存したらしく、たとえば天明七年（1787）にこの地を訪れた古川古松軒（ふるかわこしょうけん）は、住職から松浦佐世姫の伝説を聞いたと書き留めている。

知る限りでは、蛇骨堂を空海と関わらせてを記すものは『一目玉鉾』のみである。西鶴当時には本当に空海伝説と関わっていた時期があったのだろうか、それとも西鶴の創作なのだろうか。西鶴の旅行と説話収集との実態は、まだ明らかでない点が多いのである。

【3】描かれた女性 ——よしわら（巻二・十三丁裏）



『一目玉銚』は上段に文章、下段に道中地図という構成をもつが、両者をつきあわせてみると、必ずしも対応していない事に気づく。そのうちの 하나가巻二、「よしわら」である。上段には説明が全くないが、下段には挿絵がある。見ると女性が描かれているようだ。『一目玉銚』の中には人物が多く描かれているが、そのほとんどが男性である。このように女性が描かれている箇所は珍しい。

吉原は、江戸から東海道を歩いて原と蒲原との間に位置する宿駅である。富士山の眺望がよく知られている。挿絵で暖簾を垂らした家は旅籠だろう。となれば、前に立って旅人と語るがごとき女性は客引きの留め女を描いたものと考えて間違いない。留め女は飯盛女、出女とも言い、遊女のような役割も果たした。

旅人が宿場で遊女に癒されるのは当時の旅の常。よって、このような場面はどの宿場でも見られたはずである。たとえば同じ東海道を描く浅井了意『東海道名所記』（万治年間〈1658～60〉刊）では、品川、水口、大津などでこうした挿絵が描かれている。

『一目玉銚』で、ことさら吉原宿にこの図柄が描かれているのは、まさか「よしわら」という名前の縁で遊女を描いたダジャレという訳ではないだろう。ただ、宿場を絵で表すには、これ以上ない有効な図柄だという事は言える。先にも述べた通り「よしわら」には文章の説明が無いけれども、ここが宿場だという事は留め女の絵だけですぐに分かるのである。

【4】 欠かせない名所和歌 ——佐夜の中山（巻三・二丁表）



佐夜の中山（小夜の中山、佐世の中山とも）は、東海道を江戸から行って金谷と日坂（にっさか）との間にある峠で、難所かつ名所の一つである。この地を詠んだ西行の和歌、

年たけてまた越ゆべきと思ひきや命なりけり佐夜の中山

は、東海道の名所を詠んだ和歌の中でも、最も著名なものの一つであろう。

しかし『一目玉鉾』は、巻三に「佐夜中山」の項を設けているにもかかわらず、この和歌を掲載しない。その全文を引用してみる。

○佐夜中山

待明すさよの中山中／＼に一声つらき時鳥かな

旅衣夕霜さむき篠のはのさやの中山嵐吹也

鳥のねを麓の里に聞捨て夜深く越る佐夜の中山

古代には此峰に関の戸ありし

佐夜の中山に関する和歌を三つも掲載しておきながら、「命なりけり」の和歌を掲載しないというのは不思議である。『定本西鶴全集』の注釈によれば、『一目玉鉾』が引用した三つの和歌は、すべて『新後撰和歌集』から採ったものであるという。

俳諧師であった西鶴であれば諳んじていてもおかしくない「命なりけり」の和歌を用いず、『新後撰和歌集』から三つも和歌を採用するとは、どのような意識なのだろうか。

『一目玉鉾』には地名にちなんだ和歌が数多く引用されている。しかし著名な和歌が掲

載されず、あまり知られていない和歌が見えることが、ままある。また出典の明らかでない和歌もまだ多く残されており、解明が待たれている。

【5】ランドマークを描く ——淀の城（巻三・二十二丁裏）



『一目玉鉦』には数多くのお城が描かれている。これらがその構造を正確に表しているのか、城郭に詳しくない筆者には良く分からない。

だが、巻三の「淀の城」だけは筆者にも一目で「あ、淀城だ！」と分かる。その理由は水車が大きく描かれているからである。

淀城は松平定綱が元和九年（1623）～寛永二年（1625）にかけて建てた平城である。そのシンボルともなっているのが宇治川に接した北面に水車で、多くの和歌や絵画に描かれた。西鶴も『武家義理物語』巻三の一に「やう／＼淀の小橋（こばし）を過ぎ、水車の夕浪おもしろく」と記している。

全国の地理を描く『一目玉鉦』であるが、作者西鶴も大坂出身なら出版も大坂。読者も京阪が中心であった事は容易に想像がつく。遠い地の城はともかく、大坂のランドマークとも言える淀城の水車は、さすがに正確に描く必要があったろう。

【6】タコの名産地 ——明石（巻四・五丁表）



明石ダコと言えばマダコの代表格である。明石周辺の魚文化を記した好著・鷺尾圭司『明石海峡魚景色』（1989年8月 長征社）もその巻頭に「明石ダコ」を置き、マダコの中でも「速い潮流と豊富なエサで、ボディービル選手のようにがっしりと育つ明石ダコは、名実ともに日本一と評価されます」と記している。

しかし『一目玉銚』の記述は異なる。巻四の「明石城主」の項には次のように記されている。「大坂より是まで十五里の所なり。此浦の名物、飯蛸、縮布」。つまり記されているのはマダコでなくイイダコなのである。イイダコはマダコに比べて小型で足を含めても20センチほど。卵が飯粒のような形をしているのでそう呼ばれる。マダコとは別種であって混同とは考えがたい。

『一目玉銚』はおそらく、播州高砂のイイダコの事を書いているのだろう。江戸時代におけるその評価の高さは注目すべきである。松江重頼『毛吹草』（明暦元年〈1655〉刊）巻四は地域ごとの名産を挙げているが、その「幡摩（ママ）」の箇所にかかるタコは「高砂飯蛸（タカサゴノイヒダコ）」「二見蜘蛛蛸（フタミノクモダコ）」の二つだけである。また時代は下るが『和漢三才図会』（正徳三年〈1713〉刊）には、播州高砂の産は、頭の飯多し。摂、泉の産は、飯なきものもまた半ばす」と高砂の飯蛸を評価している。

現代の播磨のイイダコは、と、先の『明石海峡魚景色』を見てみると、冬の章の巻頭にイイダコがいた。「播磨の冬の味を演出」とある。捕り方は、「いまでも、巻貝のニシの殻やダボ貝と呼ばれるウチムラサキ貝の殻を縄に連ねて仕掛け、玉子を海にくるイイダコを

捕らえます」とある。いまは明石のマダコを押しよける程ではないにせよ、なおも播州の味であるようだ。

#### 4 翻刻

ホームページに画像を掲載するにあたり、本文の翻刻を付した。そのさい、地図中に記された地名についても翻刻した。またその地名の翻刻に際し、平仮名で表記されている項目については漢字地名も付記した。地名での検索にヒットしやすいための措置である。

また「画像検索」の画面では、すべての画像にキャプションを付し、どのような地域を描いたものか分かるようにした。これもまた幅広い興味からの閲覧・検索が予想されることを鑑みての措置である。

以上



の柴垣や柳や松、牡丹、鴛鴦や鶺鴒の親子、画中画の屏風など、点景は細かく丁寧に描かれる。もともと潮汲や製塩、塩の運搬などの労働場面に關しては、人物も大人しく小奇麗すぎ、人形のようにある。

顔立ちも、塩焼きから身を立てた苦勞人の文正も、大宮司も新居の中將も娘達も、等しく白塗りであり、一部の庶民や従者の顔色にわずかに代赭が差されるのみである。特に文正など主だった男性は目、鼻、口が細密に表され、文正の妻や娘達の顔もゆつくりした丁寧な線で、細かく描き込まれる。口はいずれも深紅に塗られ、やや大きめで開いたり閉じたりするのが目立つ。ただし顔立ちには年齢差や個性はほとんどなく、表情には悲しみや困惑、驚愕といった感情は表されず、わずかに身振りでそれと知られるばかりである。

特徴的なのは着衣で、大宮司の家族に始まり、主人公の娘一家から見物人まで、一人ひとりの着物が鮮やかな色遣いで、さまざまな紋様が極めて細やかに描き分けられている。また、時に屋敷の唐紙や几帳にも、繊細な模様で彩られている。

文正は最初の暇を出される場面では、四目紋のついた水色の小袖に縞の袴、以後は小紋の水色の小袖に薄いあざき色に臙脂の模様の袴という江戸時代風の着衣だが、殿上人になったためか最後の二場面だけは黒の束帯である。文正の妻は終始変わらず薄黄に赤と青の花模様、姉娘は桃色に濃い紅色の亀甲の丸模様を描いた桂、と王朝風の貴女の装いであるため、文正とは時代も身分も不釣り合いに見える。

二位の中將は、夏の青い三重襷文の直衣という極めて伝統的な王朝の貴公子の姿から、商人に身を窶した場面では、付き添いの一同とともに、黒の紋付羽織に裁着袴に笠という、当世風のくだけて洒落た姿に一変し、同じ人物とは思いがたいほどの差異がある。

王朝風、当世風と場面ごとに変わる表現には、一貫した論理性や、

写実性を求めることはできないが、それぞれの場面を完結した美しいものに仕上げようとする意図は、特に王朝風男女の恋の場面において成功している。また、塩を運ぶ牛馬や、中国風の服装の見通しの尉が自然に描かれており、漢画にも巧みな絵師ではないかと想像される。

### 3. 類例に關して

本絵巻と同一の画風の絵巻や絵本の例は、未だ知らない。ただし、共同研究者の柴田雅生の指摘によると、茨城県立歴史館所蔵二曲一隻の「文正草子」屏風が、本絵巻下巻第一図の管弦の会で風に揺らいだ御簾の間から中將と姉娘が見合う場面と一致するという。実見はしていないが、ホームページの図版<sup>2</sup>で見ると、構図はほぼ同一で、配色がやや異なるようである。両者に共通する原本があったのか、或いはいずれかが構図を写したのか、より詳細な観察と考察が必要である。

<sup>1</sup> 赤澤真理「江戸前期における寢殿造りへの憧憬と理解―住吉派物語絵にみる住宅観」『講座 源氏物語研究【第十卷】源氏物語と美術の世界』二三四・二六五頁 おうふう 二〇〇八年

<sup>2</sup> [http://www.rekishikan.museum.ibk.ed.jp/06\\_jiten/shozou/bunsyo\\_nzousibyoubu.htm](http://www.rekishikan.museum.ibk.ed.jp/06_jiten/shozou/bunsyo_nzousibyoubu.htm) (所蔵資料紹介・「文正草子」屏風)

#### 中巻第四図

恋煩いの中將を見かねた式部太夫と藤右馬助と兵衛佐の三人は、文正の娘達のもとへ、商人に身を賣して会いに行くことにした。

#### 中巻第五図

中將は両親に歌を書き置き、商人姿に身をやつして密かに旅立つ。鹿の鳴声にも文正の娘を恋いつつ、一行は常陸へと下る。

#### 中巻第六図

中將の一行は常陸の国に着き、鹿島大明神に恋の成就を祈る。翌朝、文正の屋敷を訪れ、都の商人と名乗って持ってきた品物を売る。

#### 中巻第七図

姫君達の侍女で都を知る女は、一行が都の貴公子だと気付いた。文正は物売りの口上を面白がって、何も知らずに一行を屋敷に泊める。

#### 下巻第一図（横長の画面）

中將は手箱の底に恋文を忍ばせて贈り、姉娘は心をときめかす。管弦の会が催され、中將は御簾の内の娘達へと心を込めて弾く。

#### 下巻第二図

もう一度姉姫に会いたい中將は、その夜、姉娘の部屋に忍び入る。秋の長夜に二人は浅からぬ契りを結び、後朝の歌を詠み交わす。

#### 下巻第三図

絵は中將が姉君に寄り添い、これまでの経緯を明かしかき口説く場面。商人が姉娘に通うと噂になり、やむなく文正は婿に迎える。大宮司

が館を訪れ、商人が都で行方不明の中將だと気付いて庭に平伏する。

絵は姉娘の婿は中將だと聞かされた文正が、驚愕して走り回る場面。下巻第四図

中將は姉娘を具して都に戻ることになる。関白の息子を婿にしてみたい中にも、文正夫婦は姉娘と離れるのを寂しがらる。

絵は中將と姉娘の一行。文正の調えた嫁入り行列を見物する人々。下巻第五図

中將の母君は、行方不明だった息子が嫁と戻って来たので喜ぶ。花嫁の噂を聞いた帝が妹娘を召して后とし、皇子が産まれる。

絵は宮中の清涼殿。文正夫婦も都に召し寄せられ、参上したところ。下巻第六図

姉娘も息子を産んだ。皇子は七歳で皇位につき、文正は大納言、妻は二位になる。文正は百歳、娘達は百二十歳まで生き極楽往生した。

絵は黒い束帯を着た文正と妻が、中將夫婦や孫息子達と歓談する場面。

## 2. 絵画的特徴

江戸時代に正月の読み初めに用いられた草紙というだけあって、『文正』の絵入り本は非常に多く、また華やかなものが作られている。なかでも明星大学本は、保存が良く色彩も鮮やかで、なにより極めて丁寧に細やかに描き込まれていることが特徴である。

絵の上下には金泥で直線的なすやり霞が区画され、中には大小の金砂子が厚目に蒔かれる。地面や土坡、障子の霞の絵には金泥がうっすらと刷かれている。建築は定規で界線がきっちり描かれた、江戸時代の数寄屋風寝殿造<sup>1</sup>であり、鮮やかな青暈が敷き詰められ、襖障子にはあつさりとした探幽風の水墨画が描かれる。

建築に比べて、風景の土坡や水波は簡単に済まされた感がある。庭

## 明星大学本『ぶんしやう』絵巻の挿絵について

山本 陽子

明星大学所蔵『ぶんしやう』絵巻は上中下の三巻から構成される。挿絵は上巻に六図、中巻に七図、下巻に六図、比較的バランス良く配され、上巻の第一図と下巻の第一図は他図の二倍近い長さがある。詞書の料紙には、金泥で霞や水流、土坡などと、草、花、小松などの下絵が草筆で描かれている。各巻の始めの料紙ほど、下絵の密度が高い。

### 1. 各図の物語場面と図様

#### 上巻第一図（横長の大画面）

常陸国鹿島大明神の大宮司は富にも息子や娘たちにも恵まれている。ある日、文太の心を見ようと、正直者の文太を呼び、暇を出した。

場面は豊かな大宮司の屋敷を表す。庭先には文太がかしこまっている。

#### 上巻第二図

屋敷を出された文太は、塩屋に雇われて働き、塩竈を得て塩を売り長者となった。文太は、名を文正と改めた。

絵は潮汲・塩竈・塩の運搬の様と、立派な屋敷を構え妻を娶った文正。

#### 上巻第三図

文正は昔の主の大宮司に、富を継ぐ子供がないことを咎められる。そこで文正は女房を追い出そうとし、驚いた女房は理由を尋ねる。

絵は女房に暇を出す文正と驚く女房。塀の外に塩の蔵出しが描かれる。  
上巻第四図

文正夫婦は鹿島大明神に参って子授けを祈る。七日目の夜半に蓮華二房を賜わって袂に入れるという吉夢を見て、二人は喜ぶ。

絵は鹿島の社殿。格子の内で通夜する夫婦に、蓮華を授ける神の使者。

#### 上巻第五図

文正の女房は身ごもり、二人の娘を生む。文正は息子でなかったことに落胆するが、女ならば殿上人の妻にもなれると説得される。

文正の側で乳母に抱かれるのが長女のれんげ、奥の白で揃えた産室で、白衣の女に抱かれるのが次女のはちす、多くの侍女たちが仕えている。

#### 上巻第六図

文正の娘たちは美しく成長した。大宮司の息子や、八ヶ国の大名から求婚されるが、女御、后の位を望む二人は相手にしない。

絵は美しく育った姉妹と、求婚に応じさせようと説得する文正夫婦。

#### 中巻第一図

国司として常陸国に來た衛府の藏人が大宮司に、文正の娘を妻にできれば国司の位を譲ると言う。文正は、国司の舅になれると喜ぶ。

絵は国司が大宮司を呼び出したところ。文正は縁側で畏まっている。

#### 中巻第二図

文正は国司に嫁ぐよう勧めるが、娘達は聞き入れない。諦めて帰京した国司がこの話をする時、関白の息子の二位の中将が聞きつけた。

絵は国司の話を中将が聞く場面。脇息に身を預けるのは恋煩いの姿か。

#### 中巻第三図

二位の中将は文正の娘達の話聞いて、まだ見ぬまま恋をしてしまひ、持ち込まれる縁談に耳も貸さず、明け暮れ思わずらう。

絵は人々が集まって中将を見舞う場面。右奥の水色の装束が中将。

一宮が『源氏物語』に由来する「絵合」で、「橋姫」の宇治の姫君の絵に恋をする発端、荒れた家で琵琶を引く女の垣間見もこの物語をなぞり、以後の二人が生き別れる諸場面も「須磨」「明石」「蓬生」「浮舟」「手習」「蜻蛉」などを彷彿とさせる。その挿絵もまた、源氏絵の各場面を基にして描かれたものであるのか、いずれ刊行予定があるという『源氏小鏡』と対比させて考察したい。

また、奈良教育大学図書館所蔵の奈良絵本『しぐれ』下冊の挿絵も、インターネットで公開された画像<sup>3</sup>で見ると限りながら、霞の形や形状、人物の体型や容貌、松や家屋の形態などが近似し、同じ流派か、同じ絵師の手になると思われる。『しぐれ』には類似作品があるとい<sup>4</sup>、さらなる類例との比較考察ができることを期待したい。

1 全挿絵（ただし白黒）は以下でも見ることができる。柴田雅生「明星大学蔵 奈良絵本『新曲』釈文」『明星大学研究紀要』【日本文化学部・言語文化学科】第一四号八五・一〇六頁 二〇〇六年

2 赤澤真理「江戸前期における寝殿造りへの憧憬と理解―住吉派物語絵にみる住宅観」『講座 源氏物語研究』【第十卷】源氏物語と美術の世界』二三四・二六五頁 おうふう 二〇〇八年

3 奈良教育大学図書館 貴重書と大型コレクション 奈良絵本コレクション <http://www.nara.edu.ac.jp/LIB/ehon/ehon.htm>

4 国語教育国文学教授 真鍋昌弘「しぐれ 解説」同ホームページ

第五図とは異なつて広く整つた配所の奥で、御息所の赤い衣を膝に、袖を目に当てて泣く一宮。座敷の端や縁先には警護の者たちが数名、控えている。

### 第十三図（下冊十九丁裏）

鎌倉幕府が滅びて後醍醐天皇が還幸し、宮も土佐から都に戻つた。御息所がこの世にいないことを深く嘆いた宮であつたが、風の便りに阿波路の武島で生きていると聞いて、都に迎える。再会した二人は涙ながらに互いの思いを語りあつた。

絵には一宮も御息所の姿も描かれぬ。立派な門の前に二台の牛車が留められ、従者たちが地に腰をおろして待つてゐる。再会した二人を乗つてきた牛車で暗示したものであろうか。

## 2. 絵画的特徴

いずれの絵にも、上下に金泥ですやり霞の線を引き、その中に粗めの金箔を砂子に蒔く。霞の周囲や土坡、障子の一部などには薄く金泥を刷いて調子を整える。畳・人物・樹木などには鮮やかな緑・朱・黄土・水色・白などで彩られる。海波はややくすんだ水色である。

人物は頭部が大きめで後頭部が膨らみ、首が細く前に突き出す。貴人も引目鉤鼻というよりはやや細面で目は上下の瞼と瞳が描かれたものもある。横顔は面高で鼻が高く、時に小鼻も描かれる。従者や下人、海人も細目ながら品よく描かれ、顔を淡い代赭や浅黒くすること身分の違いを表す。表情の差はほとんどなく、敵を追う武文も、松浦五郎も穏やかで凄味のない顔である。

一宮ら貴人の着衣や几帳には細やかに有職紋らしきものが描かれる。一宮は場面や季節により着衣を替えて描かれるが、御息所は終始、赤褐色の円紋の表着で、重ねた着物の色目も変わらない。貴人の着衣の

手慣れた描き方に比べ、甲冑姿はややぎこちない。

御所などの建築は江戸初期の数寄屋風寝殿造<sup>2)</sup>として表され、畳が敷き詰められ、障子には余白を多く取つてあつさりした水墨画が描かれる。塀や縁の板には片暈しが施される。生い茂る雑草や、縁や欄干の朽ちた様などのような屋敷の荒れた状況は描かれず、配所や海人の家も藁葺ながら小奇麗に表されている。

池の水紋や海波は水色地に白い線で描いた、形式的な大和絵の表現であるが、海が荒れる場面では波の高さに変化をつける工夫がなされ、波頭も表されている。

各場面の解説でもその都度触れたように、しばしば本文の内容とは細部で違つて描かれている。あばら家のような醜いものは描かれず、荒々しい感情も表されない。原文に忠実に再現した絵というよりは、先行する複数の物語絵の画面から、近似する設定の場面を引用し合成した感が強く、一続きの物語としての流れよりも、それぞれの画面で完結した美しさに重点が置かれているようである。

## 3. 類例について

本図と表現が似ている挿絵の例として、石山寺所蔵の絵入り本『源氏小鏡』を挙げたい。『源氏小鏡』とは『源氏物語』五十四帖の梗概を書いた本であり、平成二十一年に公開され話題を呼んだこの作品は、その各帖ごとに挿絵が付いたものという。

石山寺本は、挿絵の一部を見る限りながら、男女の顔立ち、立ち姿、築山や水際の描き方や水波の表現、霞の形、塀の片ぼかしの方法、色調までも近く、同じ流派、恐らくは同一の絵師によって描かれたものではないかと思われる。

『新曲』の物語は、『源氏物語』の各場面を下敷として語られている。

武文は都に御息所を訪ねるが、館は荒れ果て人の気配はない。行方を捜して嵯峨野の奥の山里に、琵琶の音を頼りに御息所を探し当てた。互いに泣くばかりであったが、武文は御息所に、宮の迎えの文を差し出す。

豪壮な屋敷の縁先で、手紙を渡す武文。奥の几帳の前に座る御息所。本文の「誰住みぬらんと見るも物憂げなる宿の内」「垣の破れ」「御簾の破れ」というような荒れ果てた館ではなく、控える女房達の装束も整って美しく、本文とは異なる状況である。

#### 第七図（上冊二十三丁表）

土佐へ向かう一行が尼ヶ崎で船を待つところを、筑紫の松浦五郎が覗き見て、御息所に惚れ込んでしまった。五郎は御息所を奪おうと配下に宿を襲わせ、武文は一人で対戦する。御息所を逃がそうとした武文は、それと知らずに五郎本人の船に乗せてしまう。

図は尼崎の宿に押し掛ける松浦五郎の配下の軍勢に立ち向かう武文。敵は甲冑に籠手脛当てまで着けた完全武装であるが、武文は狩衣の袖をまくり袴の裾をたくし上げただけの姿で迎え撃つ。

#### 第八図（下冊二丁裏・三丁表）

御息所を船に迎えた松浦五郎は、喜んで臙綱を解く。驚いた武文は小舟で追い呼び戻そうとするが、御息所を乗せた船は沖に出てしまう。追いつけぬと見た武文は、龍神となって船を止めようと腹を切って入水する。

唯一の見開き図である。画面中央には松浦五郎の船を大きく描き、その屋根の下には御息所、傍らに御息所を口説く松浦五郎を横顔で表す。下方に陸、右下に船上に立って扇で船を呼び戻そうとする武文を描くが、松浦五郎も武文も表情は穏やかで、あまり必死には見えない。

#### 第九図（下冊六丁裏）

御息所は泣き伏すばかりで、五郎の慰めにも応じない。筑紫へ下ると聞いて北野天神に帰京を祈る。船は阿波の鳴門で渦に巻き込まれ、御息所の衣を海に投げると渦は静まるが、三日三晩船は同じ所を廻り続ける。

前図の松浦五郎の船の一部を再現したような構図。手下の一部の配置と御息所の向きが異なる程度。しかし前図では穏やかだった海波のみが一面に高く盛り上がって描かれ、その中に御息所の赤い衣が浮く。

#### 第十図（下冊十一丁裏）

船が進まないのと同が祈祷をすると、波の上に切腹した武文の怨霊が鎧兜姿で現れる。扇を持って止まれ止まれと招くので、ついに松浦五郎は御息所を小舟に乗せて海に流す。

前図とほぼ似た構図の松浦五郎の船、波は全体に高く、左下の波上」に甲冑のまま馬に乗って扇で差し招く武文の亡霊。松浦五郎は御息所に背を向け、配下の男たちは吐いたり、松浦五郎に訴えたりと乱れる。

#### 第十一図（下冊十四丁表）

松浦五郎の船は転覆して沈み、御息所の小舟は淡路の武島に流れ着いた。御息所は介抱されて生きかえり、土佐へ行きたいと頼むが、道中の危険を案じた海人たちに止められる。

海辺の藁葺で丸木柱の苦屋の奥の畳に座す御息所と、端近で対面する三人の海人たち。漂着して介抱された御息所は初めの場面から終始同じ装束で、やつれた様には描かれていない。

#### 第十二図（下冊十七丁裏）

宮は土佐の配所で御息所の到着を待っていたが、音沙汰がない。警護の武士が鳴門の海から拾ったという衣を見ると、宮が御息所に送った装束であるので、御息所も武文も海に沈んだと思った宮は嘆き悲しむ。

## 明星大学本『新曲』の挿絵について

山本 陽子

明星大学本『新曲』<sup>1</sup>の挿絵は、上冊七図、下冊に六図あり、下冊の最初の第八図が左右にわたる見開きで、それ以外は左か右の片面に貼り込まれている。また、半分くらいの料紙には詞書の下絵として、金泥で杜若、波に桜、蒲公英、菊の折枝、波に紅葉、蔓竜胆などが速筆ふうに、やや小さめに描かれている。

### 1. 各図の物語場面と図様

#### 第一図（上冊三丁裏）

後二条院の一宮は、心になかう女性がなく独身で過ごしていたが、関白家の絵合の会で見た源氏絵の女が心にかかった。そこで絵を手元にとどめ、繰り返し見るが、心は満たされない。

絵は関白家の絵合の会。左奥、扇を手取るのが一宮か。原文では絵の女に恋をした一宮がこの絵を手元に置いて、「捲き返し巻き返し」御覧になると書かれているのでこの絵合の絵は絵巻物のはずだが、本図では、近世風に扇の絵で行われている。

#### 第二図（上冊八丁表）

宮は絵の女を恋うあまり、この世の女に見向きもしない。気晴らしに糺の宮に詣でた帰り、一条辺りの家で琵琶を弾く女を築山の陰から見まもる。それは絵に違わず一層あでやかな女性であった。絵は左の屋内で琵琶を弾く女と、泉水のある庭にじかに座して女を見

る一宮。本文には「垣に苔むし瓦の松も年降りて住み荒らしたる宿」とあるが、館にも庭にも荒廃を思わせるような表現は見られない。

#### 第三図（上冊十二丁表）

垣間見た女を恋う宮のために、中将為冬が身元を調べると女は左大臣の娘で左大将の許婚であった。為冬の秘策に従い、宮は歌の御会にことよせて左大臣宅を訪れて女に会うが、女はなびかない。

左大臣宅で縁先に立ち女の部屋を垣間見て御簾に手をかける一宮、背後は仲立ちの左中将。大きく描かれた屋内にひとり居る女。本文には「人々が詠みたりし歌の短冊取り上げて」とあるが、短冊は見えない。

#### 第四図（上冊十五丁表）

女の許嫁である左大将がこのことを知って身を引いたので、宮は女を御息所として、偕老同穴の契りを結んだ。しかし一年も経たぬうちに宮は元弘の乱に関わって土佐に流され、残された御息所は都で嘆き沈む。

一宮が流罪になり、几帳の陰で袖を目に当て泣き沈む御息所。本文では「年来仕えし青侍、官女一人も参り通わず」「住み荒らしたる蓬生の宿」とあるが、絵では整った屋敷で侍や女房達が気遣わしげに控える。

#### 第五図（上冊十七丁裏）

宮は土佐の配所で、身の上と御息所を思つての嘆きは晴れる間もない。見かねた警護のあかゝ（有井）の庄司が、都から御息所を呼び寄せるよう勧め、衣を調進し旅の用意を整えたので、宮は使いとして秦武文を都に遣わす。

海際の配所で御息所に手紙を書く一宮と、傍に控える秦武文。庭先には縁座に座つて控える男達。「あさましげなる殖生の小屋」は藁屋根と青竹の縁側で表されるが、家も浅黒い顔の男達の着衣も小奇麗である。

#### 第六図（上冊二十丁表）



るのに対して、『新曲』は、高貴な二人の出会いと別れ、そして再会までである。同じ題材を扱った『中書王物語』（一条兼良作か）との先後関係は不明であるが、原妣と同じ終末を迎える『中書王物語』に対して、『新曲』は再会の喜びでめでたく終えるという点で祝言性が強いと言える。また、本絵本の挿絵に関して、版本で印象的な武文が御息所を背負って逃げる場面や、武文の自害の場面は描かれずに、むしろ船上の御息所に描写に筆がさかされている。御息所の悲しみを強調しているかのようである。

本文は、わずかに文意が通らない箇所があるが、おおむね幸若舞寛永版本とほぼ同文である。挿絵は細部まで丁寧かつ上品に描かれている。土佐派の流れを汲む絵師の筆になると思われる。背景や着物の模様といった細部までを精密に描き、霞には金箔を散らす。

『新曲』の奈良絵本・絵巻は、工藤早弓『奈良絵本 上・下』（京都書院、後に紫紅社文庫）に紹介されている横本二冊などがあるが、幸若舞の絵本・絵巻の中でも、その存在が知られている伝本の数が少ない。残念ながら『新曲』は含まれていないが、チェスター・ビーター・ライブラリ所蔵『舞の本絵巻』（六軸九曲）が題箋に「三十六番舞」と記すように<sup>2</sup>、幸若舞曲三十六番の絵本・絵巻が一揃いで製作された可能性があり、本絵本も含めた全貌がいずれ明らかになることを願うばかりである。

ブラリイ絵巻絵本解題目録 図録篇・解題篇』（平成一四年、勉誠出版）

<sup>1</sup> 『文正草子の研究』（昭和五八年、桜楓社）

<sup>2</sup> 国文学研究資料館・The Chester Beatty Library 共編『チェスター・ビーター・ライ

た寛文四年長尾平兵衛刊『ふんしやうのさうし』の本文に近く、貴重な伝本と言える。特に、文正の娘たちと鹿島大明神との因縁の深さが幾度となく語られる点で、御伽文庫等が出世譚を色濃くするのは異なり、神仏思想の因果応報を強く印象づけている。その意味では鹿島大明神の靈験記とも言える作品である。

その本文は、わずかに文意が通らない箇所があるが、挿絵は極彩色で細部まで丁寧に描かれ、優美さ、上品さを強調したものととなっている、

『正文草子』の奈良絵巻・絵本は、現存最古の奥書（寛永八年）を有する筑波大学蔵絵巻（二巻）をはじめとして、きわめて数多く残されている。それだけめでたい絵本・絵巻として求められ、大切に扱われてきた証しでもある。

## 『新曲』

### 書誌

紙本著色 二冊

大きさ 縦二九・六糎 横二二・二糎

表紙 新調草花模様の緞子織（改装）

題箋 上冊・下冊ともになし

料紙 金泥で施された草花の下絵あり。

挿絵 上冊 七図

下冊 六図（一図は見開き、他は半丁分、計十三図）

江戸時代前期

室町時代に大成した芸能である幸若舞曲三十六番のうち、最後に追

加された新しい曲との意から『新曲』と名付けられた詞章を、極彩色の絵本に仕立てたものである。原拠は『太平記』巻十八「一宮御息所の事」で、後醍醐天皇の第一親王尊良親王と御息所の恋を中心に、秦武文の武勇を織り混ぜて描く。

おおよそのあらずじは以下の通り。

一の宮尊良親王は、鎌倉幕府の計らいで後二条院の第一皇子である邦良親王が皇太子となったため、失意のうちに暮らしていた。ある時、関白左大臣家の絵合で見た『源氏物語』宇治八宮の女にあこがれ、下賀茂神社参詣の帰り道に源氏物語絵そっくりの女房を垣間見て、恋に悩むようになる。女が今出川右大臣公頭の姫君とわかり意中を伝えるが、徳大寺左大将と婚約していると知って諦めると、徳大寺左大将は身をひき、二人は晴れて夫婦となる。

まもなく元弘の乱が起こり、土佐国幡多へ流された一の宮は、御息所を迎えるため都へ秦武文を使い遣る。武文は嗟嗟野でひっそりと暮らす御息所を探し当て、尼崎で渡海の舟を待っていたところ、御息所の美しさに目をつけた松浦五郎によって御息所を奪われ、武文は腹をかき切って自害する。御息所を乗せた舟は阿波の鳴門で武文の怨霊が起こした波に行く手を阻まれ、五郎は龍神を鎮めるために小舟で御息所を流し、御息所は淡路の武島に流れ着く。海に流された御息所の衣が一の宮の許に届けられ、御息所の遭難を知った一の宮は悲しみにくれ、御息所の菩提を弔う。公家一統の世となり都へ戻った一の宮に、御息所の生存が知らされ、都へ迎え入れて喜びの再会を果たす。

原拠である『太平記』「一宮御息所の事」が二人の悲劇的な死で終え

# 明星大学本『ふんしやう』『新曲』について

柴田 雅生

## 『ふんしやう』

### 書誌

紙本著色 三軸

幅 いずれも三三・一糎

長さ 上巻 一三三四・九糎

中巻 一三六五・八糎

下巻 一三二九・六糎

表紙 練地草花模様緞子装

題箋 上巻「ふんしやう 上」

中巻「ふんしやう 中」

下巻「ふんしやう 下」

付属の黒塗箱には「文正物語」と記す。

挿絵 上巻 六図

中巻 七図

下巻 六図 計十九図

江戸時代前期

所謂御伽草子の代表的作品の一つで、一般的には『文正草子』と呼ばれる本話は渋川版御伽文庫計二十三篇に収められるだけでなく、絵本・絵巻

を含む数多くの伝本が残されている。話の大筋はほとんど変わらないが、多数の伝本故に数多くの異なる本文と挿絵が存在する。製作依頼に応じて、要約や省略、増補が繰り返され、さまざまな姿を残すようになったものと思われる。

おおよそあらずじは以下の通り。

常陸国鹿島大明神の大宮司に仕える文太という正直者の雑色が、大宮司の怒りを買って追放され、塩焼く浦に辿り着いて塩屋に雇われる。後に塩釜を貰い受けて自ら塩を焼いて売ると、評判の塩として高価で売れ、たちまちに大長者となつて文正と名乗るようになる。

再び大宮司に召された文正は、子宝に恵まれないことを悲しんで、夫婦で鹿島大明神に参詣し、二人の姉妹を授かる。姉を蓮華、妹を蓮と名付け、姉妹は才色兼備の美女に成長する。ところが、二人の姉妹は、関東八州の大名、大宮司の子息、常陸国国司などから求婚されるものの、まったく受け付けようとしない。

そんな折、都で姉妹の評判を聞いた二位の中将が京商人に身をやつして常陸国へと下る。文正の屋敷に着くと、物売りの口上で文正を面白がらせ、その館に宿を与えられる。その夜、首尾よく寝所に忍び入った中将は、素性を明かして姉君と夫婦の契りを結ぶ。大宮司を招いて開いた管絃の席で、京商人が実は二位の中将であったと知った文正は狂喜する。中将は姉君を都へ連れ帰り、妹君も帝に召されて、やがて皇子を出産する。上洛した文正夫妻も、文正は七十にして宰相の位に昇り、妻も二位殿と仰がれ、一族は栄華をきわめた。

その中で、明星本は、岡田啓助氏<sup>1</sup>が原本の姿を多く伝えているとされ



表 明星本『徒然草』挿絵の場面選択と、構図を主とした比較 (段数表示は『日本古典文学全集』による)

写真	対象箇所の書き出し	明星本『徒然草』挿絵の構図	『なぐさみ草』(慶安5年跋)の同段挿絵	『改正頭書つれづれ草絵抄』(元禄4年跋)の同段挿絵	『版本絵入徒然草』(寛文12年跋)の同段挿絵
上6	1 (末尾)ありたき事は…	酒宴。拍子をとる者など俗人五人	近似 手前の一人向き逆	相違	絵なし
上18	17 山寺にかきこもりて…	山中の寺院。瓦葺の三棟	近似 建築似 岩山の位置相違	相違。屋内を見る視点	絵なし
上35	32 九月廿日の比…	帰る男と隨身・屋内で月見る男と覗く僧	近似 さらに仕丁一人有	近似。門有、人物配置相違	近似 門有
上55	54 御寮にいみじき児の…	児と僧三人。一人は落葉を探る	近似 手前にさらに俗人一人	相違。人数相違。盗人一人	相違 盗人二人
上73	80 人ごとに我が身に…	弓を引く僧俗。数珠を持つ俗と弾琴の僧	近似 右端に琴でなく文机	相違	近似 俗人は手に中啓
上90	103 大覚寺殿にて…	屋内で談笑する三人の男。立ち去る男	近似 梁あり 談笑は四人	近似。瓶子あり。	構図左右逆
上107	121 養ひ飼うものには…	一頭の裸馬を引く仕丁三人と子供	相違	相違	213段に近似する馬と仕丁三人の図
上119	134 高倉院の法華堂の…	屋内で座し、鏡を見る僧侶	近似 建築やや相違	相違	絵なし
下9	144 榎尾の上人…	川で馬を洗う男と橋上から声をかける僧	近似 馬と馬子の向き逆	相違。着衣人数向き相違	近似・服装景色など相違
下17	137 花はさかりに…	屋内で脇舄にもたれ外を見る僧侶	近似	相違	近似・屋外景色相違
下36	173 小野小町が事、	破傘と杖を持ち頭陀袋をかけた蓬髪の女	近似 小町は袋を負う	相違。小町屋内 旅人一人	絵なし
下44	180 さざちやうは…	燃える左義長を囲む僧二人と童子三人	近似 童子は四人	相違。人数服装背景相違	近似・僧ではなく坊主頭の少年
下60	200 呉竹は葉細く…	御殿の縁側と左右に呉竹、河竹	近似	相違	絵なし
下65	208 経文などの紐を…		絵なし	相違	絵なし
下74	218 狐は人に食ひつく…		三匹の狐に囲まれる僧	狐を斬る僧 狐は三匹	絵なし
下88	236 丹波に出雲と言ふところ…		社・上人・旅人三人・神官	社・上人・旅人三人・神官	社・上人・旅人三人・神官
下96	240 しのぶの浦の蘆の…		立つ女に手を合わせる男	海女を見る大宮人ほか	絵なし

# 「明星大学本『徒然草』挿絵について」参考図版

(比較のため図版コントラストを強調した)



図9-2 『なぐさみ草』 137段



図9-1 明星本 『徒然草』 137段



図8-2 『なぐさみ草』 119段



図8-1 明星本 『徒然草』 119段



図11-2 『なぐさみ草』 173段



図11-1 明星本 『徒然草』 173段



図10-2 『なぐさみ草』 144段



図10-1 明星本 『徒然草』 144段

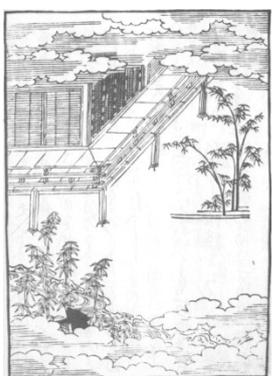


図13-2 『なぐさみ草』 200段



図13-1 明星本 『徒然草』 200段



図12-2 『なぐさみ草』 180段



図12-1 明星本 『徒然草』 180段

# 「明星大学本『徒然草』挿絵について」参考図版

(比較のため図版コントラストを強調した)



図22 『なぐさみ草』 17段



図21 『徒然草』 17段



図12 『なぐさみ草』 1段



図1-1 明星本『徒然草』 1段



図42 『なぐさみ草』 54段



図4-1 明星本『徒然草』 54段



図32 『なぐさみ草』 32段



図3-1 明星本『徒然草』 32段



図62 『なぐさみ草』 103段



図6-1 明星本『徒然草』 103段



図52 『なぐさみ草』 80段



図5-1 明星本『徒然草』 80段



図7-3 『版本絵入徒然草』挿絵



図7-2 『なぐさみ草』 121段



図7-1 明星本『徒然草』 121段

まり選ばれることのないこの段が、十三図という数少ない挿絵の中でことさら選択されたのはなぜなのか。注文主の意向か否か、他に女性の描かれた段がないことと相まって、明星本の謎とするところである。

1 絵が貼り込まれずに空白になっているのは以下の段の詞書の後である。

図版下冊六十五 第二百八段「経文などの紐を結ふに…」

図版下冊七十四 第二百十八段「狐は人に食ひつくものなり」

図版下冊八十八 第二百三十六段「丹波に出雲と言ふ所あり」

図版下冊九十六 第二百四十段「しのぶの浦の蟹の見る目も…」

2 田口栄一「源氏絵の系譜―主題と変奏―」『豪華源氏絵の世界 源氏物語』二九六頁 学習研究社 一九八八年

3 『兼好と徒然草』資料解説2 (神奈川県立金沢文庫 一九九四年)

4 『物語絵 奈良絵本と絵巻に見る古人の心』図版四十二(海の見える杜美術館 二〇〇六年) 参照。『徒然草』の注釈書、『なぐさみ草』の外題を持つが、詞書はない。淡い緑や青も差されるので彩色本に分類される場合もある。

5 有吉保編著『徒然草 詳密彩色大和絵本』解説十四頁(勉誠出版 二〇〇六年)

6 赤澤真理によれば、住吉派の「徒然草図」の建築表現には、近世風のものとの復古的なものが混在するという。(江戸前期における寝殿造への憧憬と理解―住吉派物語絵にみる住宅観―『講座 源氏物語研究』【第十卷】源氏物語と美術の世界 おうふう 二〇〇八年)

7 『日本古典文学影印叢刊 29 なぐさみ草』上下 財団法人日本古典文学会 一九八四年

8 島内裕子『なぐさみ草』の挿絵と、その影響作品「一 徒然絵の諸相」『徒然草文化圏の生成と展開』笠間書院 二八九〜二九六頁 二〇〇九年

9 稲田利徳「絵入本『徒然草』研究の視点」『徒然草論』笠間書院 二八頁

10 (参考資料)「描かれた徒然草―なぐさみ草と奈良絵本―」『兼好と徒然草』一三一〜一三九頁 神奈川県立金沢文庫 一九九四年

11 平塚泰三「徳川美術館蔵『なぐさみ草絵巻』について(上)―『徒然草』を題材とした絵巻の一例―」『金鯢叢書 史学美術史論文集』第二十三輯 百九十九〜二五三頁 一九九六年

12 青木晃解題の影印本『版本絵入徒然草』和泉影印叢刊二十六 一九七一年による。

13 元禄四年跋。一九八三年 日本文化資料センターの復刻版による。

14 大串 純夫「人麿像の成立と東寺山水屏風」『美術研究』一六四号 八十五〜一〇頁 一九五二年

15 島尾新「常盤山文庫蔵柿本人麿像について」『美術研究』三三八号 一一三〜一二七頁 一九八七年

16 笠嶋忠幸「神のいます世界―佐竹本三十六歌仙絵と人麿像―」『歌仙の饗宴』一一一頁 二〇〇六年 出光美術館

17 中野雅之「徒然草の世界」『兼好と徒然草』九十八〜一〇一頁 神奈川県立金沢文庫 一九九四年

18 仲町啓子「西川祐信研究(一)西川祐信筆絵本徒然草と十七、八世紀の徒然草絵」『実践女子大美術史学』三号 三十五〜五十二頁 一九八八年

19 榎村寛之「斎宮歴史博物館蔵『徒然草下絵(仮題)』について」『斎宮歴史博物館研究紀要』十三号 五八〜八〇頁 一九九四年

20 下原美保「住吉具慶の徒然草図制作について―斎宮歴史博物館蔵『徒然草図下絵』を中心に―」『デアアルテ』二十二号 一一七〜一四〇頁 二〇〇六年

21 ただし絵を貼り込むべく残された空白の丁のうち、第二百四十段は、恋と結婚についての段である。仮にここに貼り込まれるとすればどのような図様の絵であったかは、想像すると興味深い。

ている。第五十四段の盗まれた弁当を探す僧たちは、紅葉見物が散々な結果に終わってしまうにもかかわらず、困っている様子には見えない。第三段で怒って退出する場面の忠守は、自らの出自を嘲られたにもかかわらず和やかな顔で、いずれも何事も起こっていないかの如くのかな場面として描かれる。

第三十四段の、鏡で自分の醜さを知って引き籠る僧の顔も、第七十三段の老衰の小町の顔も肉体も、元となる『なぐさみ草』挿絵に比べ、さして醜悪ではなく、いずれの表情も惨めではなく、微笑んでいるようにさえ見える。これらは各段の内容を表すためには不適切な描き方であるが、絵師は本文の説明に徹するよりは、それぞれの画面を穏やかに美しく纏めることを優先したためと考えられる。

個々の人物像について見ると、特定の人物、例えば高山寺の明恵については明恵上人樹上座禅像などによってその顔貌が知られているが、挿絵には特に本人との近似性を意識したようには見えない。ただし、例外となるのが兼好自身の姿である。

多くの『徒然草』挿絵では、冒頭に「徒然なるままに」筆を執る兼好の姿が扉の肖像画のごとく、描かれている。例えば挿絵を文の上方の区画に連続して描く『改正つれづれ草絵抄』でも<sup>13</sup>、冒頭のこの図のみは例外的に、半丁の紙面全体を使って兼好の姿を描いている。

その代わりともいえるのが、本来下巻冒頭の挿絵となるはずであった図版下冊17（図10・1参照）、第三百三十七段「花はさかりに」の兼好である。左半身を脇息に預け右膝を立てた形は、中国の白楽天<sup>14</sup>あるいは維摩居士<sup>15</sup>の姿に倣った一部の柿本人麻呂像に見られる<sup>16</sup>。もので、聖的な文人として表されたものと考えられる。明星本は、構図は『なぐさみ草』挿絵と同じながら、この段の主題である桜や月は描かれず、その分、兼好の姿に絵の重点が置かれる。顔や手に淡い赤で

隈が入れられ、着衣には墨の濃淡がつけられ立体感が出されている。

## 5. 明星本の挿絵選択について

近世の『徒然草』絵本の多くは版本『なぐさみ草』の挿絵に基づいているわけだが、それゆえにいずれも同じということにはならない。『徒然草』には、日常雑記的な段、中国や日本の故事についての段、僧院で起こった小事件、かつての宮仕えに関する段など、多彩な内容が含まれている。『なぐさみ草』に描かれる百五十七図を基にするとしても、どの段を選んで描くかで、印象はかなり異なってくる。

『徒然草』各本で、挿絵としてどの段を取り上げるかという選択については、「比較的絵画化されやすい章段とそうでないものの傾向はあるが、互いの作品の間に直接的な相関関係は認められず、各々の作品が自由に章段を選んでいる」<sup>17</sup>とされている。

明星本の挿絵選択で特徴的なことは、女性がほとんど描かれなことである。隠遁の文学とはいえ、『徒然草』には女や恋に関する段もあり、内裏の話には女性の登場する段も多い。女性に否定的な段でさえも、当世風の女性たちを肯定的に表現した西川祐信<sup>18</sup>ほどではないまでも、齋宮歴史博物館本<sup>19</sup>など住吉派の作品<sup>20</sup>にも、宮中や市井のさまざまな女性が描かれ、絵を雅やかで華やかなものとしている。

明星本の図様の典拠となった『なぐさみ草』の挿絵でも、女性が描かれている段は少なくない。しかし明星本で選択されたのは、女性の登場しない挿絵の段ばかりである<sup>21</sup>。第三十二段の客を見送って月を見る人物も、他本の多くでは女性に修正されているが、明星本では男性のままで表されている。

明星本で唯一登場する女性は、老いさらばえた小野小町である。この第七十三段は短く硬い考証であり、絵にするには陰惨なので、あ

### 3. 『なぐさみ草』挿絵との関連

徒然草の注釈書である『なぐさみ草』は、慶安五年（一六五二）の跋文を持つ版本であり、その全百五十七図に及ぶ挿絵は、以後の徒然草絵に大きな影響を与えているとされる<sup>8</sup>。明星本の挿絵の構図を『徒然草』の他本の挿絵と比較したとき、表「明星本『徒然草』挿絵の場面選択と、構図を主とした比較」に見るごとく、そのほとんどの構図から、『なぐさみ草』の挿絵との共通性が見出される。

明星本が『なぐさみ草』挿絵の影響を受けていることは、例えば第三十二段（図2・1参照）の客を送って月をながめる人物からも言える。この人物は通常の解釈では女性であるはずだが、『なぐさみ草』（図2・2）の挿絵では男性として描かれている。後世の版本などでは、構図は受け継ぎながらも女性に修正されることもあるというが<sup>9</sup>、明星本では『なぐさみ草』と同様に、男性として表されている。

『なぐさみ草』の挿絵の図様は中野雅之によれば、先行する複数の奈良絵本の『徒然草』挿絵に基づくところが多いと推察されている<sup>10</sup>。しかし明星本の挿絵第十七段には、奈良絵本にはなく、『なぐさみ草』にある図様が用いられていること、第五十四段では奈良絵本のような僧が印を結ぶ図様ではなく、『なぐさみ草』と同じく数珠を擦る図様であることなどから、これら先行の奈良絵本からではなく、『なぐさみ草』挿絵か、それに基づいた以後の挿絵から影響を受けたと考えられる。

この版本『なぐさみ草』から図様を取った『なぐさみ草』絵巻として、徳川美術館と海の見える杜美術館本がある。「大和絵の伝統を引く専門絵師の手によると考えられる」<sup>11</sup> 徳川美術館本は、縦長の構図を横長に変えたための図様の变化があり、第三十二段の人物配置、第二百段の河竹の位置なども異なっている。三者を比較すると明星本は

徳川本より、もとの版本に近い。海の見える杜美術館本（註3参照）は、水墨淡彩に金泥を加えた彩色という点では明星本に似てはいるが、人物の表情や画風、複数の段を組み合わせて繋げた図様は相違し、明星本にこの両絵巻からの直接の影響は考えられない。

明星本で唯一、『なぐさみ草』と図様が違うのは、第二百一十一段「養ひ飼うものは」（図7・1参照）である。『なぐさみ草』では本文の趣旨である檻に入れられた禽獣（図7・2参照）が表されるのに対し、明星本では冒頭の、牛馬は繋いで飼うのはかわいそうだが無ければ困るのでやむを得ないという部分に該当する、馬を引く仕丁たちが描かれる。

寛文十二年跋の『版本絵入徒然草』<sup>12</sup>の第二三段に、前後の段と脈絡無く挿入されている図（図7・3）が、この馬と仕丁の場面と近似しているので、このような図様と『なぐさみ草』挿絵からの他の図様を併せ持った先行本に倣ったか、あるいは明星本が何らかの事情で、この図に限って別の版本から引用したかと考えられる。

明星本と版本『なぐさみ草』の挿絵を比較すると、『なぐさみ草』の方が人物の表情が険しく、黒白の木版という条件や、上下の雲の横線を引き重ねた表現も相まって背景も煩雑である。

明星本は先の各図の解説の後に『なぐさみ草』との相違点として挙げたごとく、五人ほどの集団では人数を一人ずつ減らしたり、建築の梁や壁を整理したりして画面をすっきりとさせている。これが『なぐさみ草』の挿絵を簡略化した何らかの先行本の図様を参照したためか、明星本の画面の小ささを克服するために行われた工夫かは、判らない。

### 4. 明星本の人物描写について

明星本の人物はいずれも、文意に反してまでも穏和な表情に描かれ

のでやむを得ないという箇所に対応する、裸馬を引く仕丁二人と馬子。第二百一十一段「養ひ飼うものは」の段。趣旨は牛馬以外の珍鳥奇獣を檻に入れ、翼を切つて飼うことの罪であるが、挿絵には描かれない。

■ 版本『なぐさみ草』同段(図7・2)との相違点 全く相違。『なぐさみ草』では、手前の珍獣の檻、縁側の鶏籠を屋敷の縁先から見る貴人。

■ 明星本図版上冊 119 (図8・1)

絵は、屋内で乗り出すように鏡を見る「高倉院の法華堂の三昧僧」。百三十四段「高倉院の法華堂の三昧僧」が鏡をつくづくと見て我が姿の醜さを厭い、勤行に励む以外は引き籠つたことを評価し、おのれを知ることの要を説く段。

■ 版本『なぐさみ草』同段(図8・2)との相違点 中央の柱、後方の遣戸なし。

■ 明星本図版下冊 9 (図9・1) (第百三十七段の個所に貼られる)

絵は、川の中で馬の前足を洗う男と、木橋の上から問いかける明恵。

■ 第四百四十四段「梅尾の上人」(明恵)の逸話。男が馬の脚を洗いな

ら「あし、あし」というのを、通りかかった明恵が「阿字阿字」と聞

き、馬の持ち主の「府生殿」を「阿字本不生」と聞き違えて感涙を

ぬぐつたという。

■ 版本『なぐさみ草』同段(図9・2)との相違点 馬も足を洗う人の

向きも逆。明恵背後の木はなし。

■ 明星本図版下冊 17 (図10・1) (第百四十四段の個所に貼られる)

絵は、茅葺きの家の内に片膝を立てて座し、脇息に左半身を預け、屋外の景色を見る兼好の姿。傍らの木は他本と違って桜とも見えない。第百三十七段「花はさかりに」で始まる、最盛期でないところに興

趣を見出す、兼好の美意識の記述。

■ 版本『なぐさみ草』同段(図10・2)との相違点 左上の月なし、右の木に桜の花なし。庵の背後の柴垣なし。手前左下に樹木あり。

■ 明星本図版下冊 36 (図11・1)

絵は頭陀袋を首にかけ、破れ傘と杖を手に山道を歩く蓬髪の老小町。第百七十三段「小野小町が事」、小町の末路を書いた『玉造小町壮衰書』が空海の著作目録に見える事に、時代を考証し疑義を述べた段。■ 版本『なぐさみ草』同段(図11・2)との相違点 背後の水流大。小町の背に荷物なし。左手前に灌木あり。

■ 明星本図版下冊 44 (図12・1)

絵は、燃える左義長を囲んで囃し立てる二人の僧と三人の子供たち、背後の池は神泉苑の池か。

■ 第百八十段「さぎちやうは」、正月の左義長の行事の内容と、はやし

言葉「法成就の池にこそ」についての考証。

■ 版本『なぐさみ草』同段(図12・2)との相違点 子供一人減り、僧一人は橋の上に移動。右の建築は縁先のみ描かれる。

■ 明星本図版下冊 60 (図13・1)

絵の左右の竹は本文に従って葉の描き方が変えられているが、それ

ぞれの竹の根元にあるべき籬垣はなく、御溝水の位置と形状が違うなど、平安末期の清涼殿の前庭とは全く異なっている。

■ 第二百段「呉竹は葉細く、河竹は葉広し」清涼殿の前に植えられた

二叢の竹の違いを述べた段。

■ 版本『なぐさみ草』同段(図13・2)との相違点 建具は御簾と遣戸から格子と妻戸に変わる。水的位置、手前から奥へ変わる。

違えられて逆の箇所貼られている。

なお、後述する版本『なぐさみ草』同段の図版(1・13・2)7を明星本図版と並べて比較し、各図の説明の後に、明星本各挿絵の構図が『なぐさみ草』と相違している点を挙げた。

■ 明星本図版上冊 6 (図 1・1)

絵は、畳敷きの座敷で直垂に侍烏帽子の男たち五人が酒を酌み交わし、一人が扇で拍子をとって歌う場面。

第一段最末尾「ありたき事は」の酒宴に関する部分、良い声で拍子を取り、酒は強いて飲ませられれば下戸でないのが男としてよいという個所に対応する。

版本『なぐさみ草』同段(図 1・2)との相違点 下方の人物の向き。

背後左の襖は明り障子に、右に襖。板戸はなく右に部屋。

■ 明星本図版上冊 18 (図 2・1)

絵は本文から連想されるような山中の草庵ではない。漢画風の険しい岩陰に点在する建物は、入母屋造り瓦葺きの立派な伽藍に表される。第十七段「山寺にかきこもりて」仏に仕えれば清らかな心境になる、という短文に対応する。

版本『なぐさみ草』同段(図 2・2)との相違点 遠方の建築の向き。

中左に尖った岩。手前右の建物が木に隠れ加減、左の塀に門がない。

■ 明星本図版上冊 35 (図 3・1)

絵は訪問者を帰した後、軒先で月を見るその家の主の男性を、垣根の外から見る僧侶、兼好の姿が手前に描かれる。

第三十二段「九月廿日の比」、ある人に誘われて月見をした折、その人が寄った「思し出づる所」の主が、客人を送り出した後、すぐに引きこもらずに、そのまま月を見ていたという話に対応する。

版本『なぐさみ草』同段(図 3・2)との相違点 建具は遣戸から明

かり障子へ、板塀は網代塀へ。稚児の後ろの仕丁一人なし。

■ 明星本図版上冊 55 (図 4・1)

絵は稚児の前で祈るふりをする二人の僧と、紅葉の下に箱を探す僧。第五十四段「御室にいみじき児のありけるを」、僧たちが紅葉狩に誘い出す趣向に、弁当の箱を埋めておいて祈禱で出したふりをしようとしたが、埋めるところを見た他人に持ち去られてしまつて見つからなかつた話。

版本『なぐさみ草』同段(図 4・2)との相違点 背後の水流大きく。手前の小袖の俗人一人なし。

■ 明星本図版上冊 73 (図 5・1)

絵は的に向かつて弓を引く僧と公家の姿で、法師や貴族階級までみな武を好むことを表す一方、屋内の数珠を手にする武家と琴を弾く僧で、武士が弓をおろそかにして仏法や管弦をたしなむことと対比する。

第八十段「人ごとにて我が身にうとき事をのみぞ好める」の絵画化。

版本『なぐさみ草』同段(図 5・2)との相違点 右奥の文机らしきものが、もう一台の琴に変わる。手前左に灌木が描かれる。

■ 明星本図版上冊 90 (図 6・1)

来あわせた帰化人の子孫である医師忠守を題材にして「唐瓶子」とくすしただもち解いて笑いつたので、忠守が怒つて退出してしまふ場面。

■ 明星本図版上冊 107 (図 7・1)

第三百三段「大覚寺殿にて近習の人ども」が掛け合うなど話の奥の障子、左の御簾と蓆なし、手前左に板戸と明り障子、左に付書院、庭が描かれる。手前後向きの人物なし。

■ 明星本図版上冊 107 (図 7・1)

絵は冒頭の、馬と牛を繋ぎ苦しめるのは痛ましいが、なくては困る

# 明星大学本『徒然草』挿絵について

山本 陽子

はじめに

明星大学本『徒然草』の挿絵は、上冊に八図、下冊に五図の、計十三図である。いずれも冊子の右ないし左の片面に貼り込まれ、見開きの図はない。なお下冊の後半に、絵を貼り込むことを期待したと思われる、前の段を散らし書きにして終わらせて次の片面を空けた空白が四箇所ある<sup>1)</sup>。

## 1. 明星本挿絵の特徴について

絵は繊細な筆による白描で、墨の濃淡に、朱の点で口が表され、淡い朱で頬・下着の一部・炎などが彩色され、淡い金泥が土坡や霞、襖や畳などに刷かれて、調子が整えられている。図の上下には、粗目の金砂子が蒔かれ、輪郭はないものの金雲もしくは霞を形作っている。

このように白描に金泥の筆彩を加える作例は、土佐光則の『源氏物語』画帖に由来するとされ<sup>2)</sup>、近世の源氏絵でも色紙や扇形など小型の作品に多い。『徒然草』にも本図の他に、実践女子大学蔵本や<sup>3)</sup>、海有吉保所蔵の二本<sup>5)</sup>があるといい、肉筆本が比較的少ない『徒然草』絵の中では目立つ存在である。明星大学本と図版によって比較できる前者二本は正統的な土佐派とは言い難く、いずれの画風も異なっている。

る。出家者の随筆ながら、所々に王朝懐古の情がにじむ内容に、『源氏絵』と近似するこの表現が相応しいとされて用いられたのであろう。

人物の顔立ちには、公家・武士・僧侶・稚児・童子など、身分によって多少、表現の違いがある。特に第三十二段の公家(図2・1参照)などは、面長ながら輪郭は丸くおっとりして引目鉤鼻に近く、土佐派の大和絵を思わせる。武士や下人はやや角張った輪郭で、それぞれの眉や髭、目などに変化がつけられ、四肢は膝や肘、手首足首のくびれや多少の筋肉を明確にした、メリハリのついた表現である。僧侶はいずれも軽みを帯びた柔らかな筆遣いで飄々と描かれる。いずれも、口が小さいこともあつて下品な印象にはならない。

建築は、障子の棧など直線では濃淡の界線が几帳面に引かれ、縁の板などには片ぼかしが入られた、巧みで丁寧な描写である。しかし、第三十二段で妻戸とあるにもかかわらず明かり障子が描かれたり、第二百段の清涼殿東廊には庭に降りる階や石橋がなく、描写が『信貴山縁起絵巻』や『年中行事絵巻』など平安末期の絵巻と相違したりするなど、有職故実に関して正確ではない。また第百三段の大覚寺殿では付け書院が描かれ、襖や板戸にはいずれもあつさりとした水墨画が描かれるなど、総じて近世の数寄屋風寝殿造として表されている。

風景は、さまざまな種類の木が水墨の濃淡で巧みに描き分けられ、所々の切り立つ岩には水墨画的な表現が見られるが、水流や穏やかな土坡、上下の金雲などは大和絵風である。

## 2. 各図版に対応する段と絵の概要

個々の挿絵の段と主題は以下のごとくである。このうち第三十二段の挿絵は対応する詞書から二枚後、第五十四段は五枚後に、離れて貼り込まれている。また、第百四十四段と第百三十七段の挿絵は、取り



表一 明星大学本『徒然草』の挿絵の配列（貼付予定であったと推測される空白箇所を含む）

冊	所在・画像番号	絵・空白	前半丁の本文と体裁	挿絵の章段	次半丁の本文
上	三ウ 6	絵一	一段・末尾 空行あり	一段	二段・冒頭
	十五ウ 18	絵二	十七段・末尾 散らし書き	十七段	十八段・冒頭
	三十二ウ 35	絵三	三十七段・末尾 散らし書き	三十二段	三十八段・冒頭
	五十二ウ 55	絵四	五十八段・末尾 散らし書き	五十四段	五十九段・冒頭
	七十一才 73	絵五	八十段・末尾 散らし書き	八十段	八十一段・冒頭
	八十八才 90	絵六	百三段・末尾 散らし書き	百三段	百四段・冒頭
	百五才 107	絵七	百二十一段・末尾 空行あり	百二十一段	百二十二段・冒頭
	百十七才 119	絵八	百三十四段・末尾 空行あり	百三十四段	百三十五段・冒頭
下	六ウ 9	絵九	百三十七段・末尾 散らし書き	百四十四段	百三十八段・冒頭
	十五才 17	絵十	百四十四段・末尾 散らし書き	百三十七段	百四十五段・冒頭
	三十三ウ 36	絵十一	百七十四段・中途	百七十三段	百七十四段・中途
	四十一ウ 44	絵十二	百八十段・末尾 空行あり	百八十段	百八十一段・冒頭
	五十七ウ 60	絵十三	二百段・末尾 散らし書き	二百段	二百一段・冒頭
	六十二ウ 65	空白一	二百八段・末尾 散らし書き	—	二百九段・冒頭
	七十一ウ 74	空白二	二百十八段・末尾 散らし書き	—	二百十九段・冒頭
	八十五ウ 88	空白三	二百三十六段・末尾 散らし書き	—	二百三十七段・冒頭
	九十三ウ 96	空白四	二百四十段・末尾 散らし書き	—	二百四十一段・冒頭

3 『徒然草 烏丸本 上・下』(昭和五十三年、勉誠社文庫)による。数字はページ数を示す。

4 『日本古典文学影印叢刊 なくさみ草 上・下』(昭和五十九年、貴重本刊行会)による。

5 常縁本の本文は「此相国北野抄をみて西宮の記をこそしられけれ」である。村井順『常縁本徒然草・解釈と研究』(昭和四十二年、桜楓社)は、当該部分を「北野抄を見て、西宮の記をこそ知られけれ」と解するが、「北野抄」「西宮の記」という本文異同も関わって、難解であるとする。

6 副助詞「なんど」は「何と」の転、「など」はその撥音無表記形または変化形と考えられるが、明星本において、下・七十七才の「食物種<sup>な</sup>とをうへをくへし」までは「など」専用であり、その後は「など」「なんど」の混在を経て、下・八十二才「いかきなんとはかりいひやりたれば」以降は「なんど」専用となる。

7 章段間の改行がないままに続けられる例も下冊のみに見られる。ただし、出現箇所は下・十六才(百四十五段と百四十六段)、下・四十才(百七十九段と百八十段)の二箇所であり、特別な事情を想定するのは困難であろうと思われる。

8 『専修大学図書館蔵古典籍影印叢刊 つれづれ草』(平成五年、専修大学出版局)

9 有吉保編著『徒然草 詳密彩色大和絵本』(平成十八年、勉誠出版)。「某貴所」との文言は、勉誠出版のホームページの紹介文による。

10 注9に同じ。

11 文部科学省ホームページ掲載の「国語―一八(第五学年) 親しみやすい古文について内容の大体を知り、音読する事例」による。

12 寺井正憲編著『平成二十年改訂小学校教育課程講座 国語』(平成二十年、ぎょうせい)参照。

13 現行の高等学校国語教科書においても、東京国立博物館蔵『徒然草画帖』や奈良絵本『徒然草』の挿絵が掲載されているものがある。ただ、教科書としては参考絵図としての扱いに留まるように思われる。

14 田中泉「高等学校国語科「古典講読」における絵図から情報を読み取り表現する力の育成―デジタルコンテンツを活用した授業実践を通して―(平成一七年度岡山県情報教育センター長期研修員報告)」は、情報教育と関連させて行った実践報告であるが、内容は国語科における古典指導と言える。

15 山本陽子「小画面説話画における武者の顔貌表現について」(『明星大学研究紀要』「造形芸術学部・造形芸術学科」第十七号、平成二十一年)参照。

16 『十番切』の本文中には説明がないため、『曾我物語』の記述を援用することとなる。詳しくは、大月千冬「明星大学所蔵『十番切』絵巻の図様について」(平成十九・二十年度

科学研究費補助金研究成果報告書『物語絵画における武士―表現の比較研究と作例のデータベース化』、平成二十一年)参照。

学校においても古典作品の鑑賞が取り上げられることとなった。対象学年が中学年・高学年であるため、具体的な実践はこれからではあるが、基本的には原文の音読やあらすじの紹介を通して古典作品に親しむようにする学習活動が示されている。

たとえば、五年生を対象とした学習活動の例には、「①古文の読み聞かせを聞き、古文について知る。」として、『竹取物語』『徒然草』『平家物語』の冒頭を音読する活動が挙げられている。これにそれぞれの内容の解説を加え、「言葉のリズムや響き、文章の内容などに着目し、興味をもったところを紹介し合」い、さらには『枕草子』『奥の細道』『方丈記』『源氏物語』などの冒頭を示して、最後には「各自お気に入りの古文の冒頭を選び、複写や暗唱をした後、グループ内で発表する。」というものである。<sup>11</sup>

国語という教科における学習活動であるから、古文の響きやリズムに重きを置くのは当然である。言語活動をより充実したものとす今回の改訂に沿ったものとも言える<sup>12</sup>。ただ、話す・聞くという活動だけでなく、ここに視覚の要素も織り込んでみてはどうであろうか。

本学所蔵の絵本・絵巻以外でも挿絵が添えられた古典作品は少なくない。『源氏物語絵巻』『平家物語絵巻』などをはじめとする極彩色の絵巻・絵本も知られてはいるが、そのほかにも江戸時代の版本に往々にして見られる絵入り本を含めると膨大な数にのぼる。それらを古典作品への導入として活用するのである。

『徒然草』について言えば、序段の兼好法師の姿は、江戸時代の絵入り版本や注釈書である『なぐさみ草』などにおいても描かれている。随筆だけに動きの少ない絵柄ではあるが、作者がどのような状況において執筆したのか、より正確に言えば、執筆中の作者の姿を江戸時代にどのような想像したかを窺わせるものである。それを見て、兼好法

師をより身近に感じて冒頭部分を暗唱してはどうか。あるいは、教科書にはあまり取り上げられないが、百八十段の挿絵(明星本・絵十二、カラー図版参照)には左義長(どんど焼き)を踊る子供たちが描かれている。現在にも伝わる年中行事がこのように『徒然草』にも登場することを、挿絵を通して紹介してもよいであろう<sup>13</sup>。

また、物語作品であれば、作品の展開に沿って登場人物がどのように描かれているかを見ることもできる。これは中学生や高校生を対象としたものになるが、『平家物語』などの軍記物語の登場人物を挿絵の中に見出すことは作品の理解を促すことにもつながる<sup>14</sup>。本学所蔵の作品で言えば、『平家物語』において平清盛・源義経・弁慶といった著名な人物を見つけた<sup>15</sup>、『曾我物語』を原拠とする『十番切』において、主人公である兄十郎と弟五郎を、装束の描写<sup>16</sup>から推定したりすることが挙げられよう。もちろん、本文理解を踏まえてのことである。二種類の絵本・絵巻が同じ作品の同じ場面を絵画化する際の相違を手掛かりとすることも有効な手段と考えられる。

ただし、よくよく注意しなければならないのは、挿絵がその作品をそのままに反映しているか、また、作品の時代背景を踏まえて描かれているかである。江戸時代に描かれた挿絵には対象とする作品の時代ではなく、描いた当時、つまり江戸時代の趣向に沿った図様に描かれる場合が少なくない。作品と挿絵の関係を明確にした上での活用が求められるのは言うまでもない。

<sup>1</sup> 本報告書「明星大学本『徒然草』の挿絵について」の章を参照。

<sup>2</sup> 諸本の校異に関しては、秋本守英・木村雅則『龍谷大学本 徒然草 本文篇』(平成九年、勉誠社)を参照した。

補入（補入部分を△▽に入れて示す）

・天王寺の舞樂のみ都にへは△ちすといへは

（下・七十三ウ 二百二十段）

・をへ△れか高名なりとて（下・八十八ウ 二百三十八段）

・あやしのあ△つ△ま人なりとも（下・九十二オ 二百四十段）

見消（左傍に見消あり）

・しのふの浦のあまのみるめも所せう也△、くらふの山ももる人し

けからんに

（下・九十一ウ 二百四十段）

・八になりしとき△、父に問ていはく

（下・九十五ウ 二百四十三段）

傍書（振り仮名）

・ある御所さまのふるき女房の、そ△ろ言いはれしついでに

（下・九十ウ 二百三十八段）

事例は下冊のおおよそ七十丁以降に集中する傾向が見てとれる。また、底本が仮名表記であった部分の解釈を違えて、誤った漢字を宛てたと考えられる本文も同じ範囲に見える。次の傍線部は、烏丸本をはじめとする諸本において「おかしきやうに」となっている。

まれ人のきやうをうなんとも、ついでにおかし興にとりなしたるも、まことによけれとも

（下・八十ウ 二百三十一段）

これらの偏りは何を意味するか。本文の字形・字体を見るに、全編を通じて明確な差異は認めにくい。下冊後半におけるこれらの用例からは、書写者の質または書写態度の違いを指摘せざるを得ない。前述の如く、下冊の末尾には空白丁が連続する。挿絵が貼付される予定であったと推測される空白の半丁も、下冊の六十二丁以降に集中している。このほか、右の用例中にも見えるように、下・八十ウ以降には副助詞「なんど」が頻繁に表れることも指摘できる<sup>6)</sup>。詳細は不明であるが、特に下冊後半部分においては、何らかの事情で匆卒に製作されたのではないかと推測される<sup>7)</sup>。

『徒然草』の彩色絵入り写本は、公刊されている専修大学図書館本<sup>8)</sup>や「某貴所」蔵の大和絵本<sup>9)</sup>をはじめとして、豪華な絵入り本が知られている。しかし、その一方で、明星本や吉保氏が所蔵・紹介される白描絵入り本二種<sup>10)</sup>など、墨の濃淡による表現を基本として朱や金などを加えた淡彩の絵入り本の系統が存在するようである。この系統の存在は何を意味するのか。明星本の製作事情の解明と合わせて、今後の課題としたい。

ところで、『徒然草』は国語の教科書でもお馴染みの古典作品である。特に冒頭のくだりはほとんどの教科書において取り上げられる章段である。このほかにも、明星大学が所蔵する絵本・絵巻には学校教育において馴染みのある作品が多いことが指摘できる。続いては教育実践への応用について言及する。

平成二十三年度より、新学習指導要領が導入されることとなり、小

の本文部分<sup>4</sup>に見える。AとCに対応する『なぐさみ草』の本文は鳥丸本に一致するので明星本全体が『なぐさみ草』を底本としたと言いが難いが、下冊末尾の問題点を考えあわせると、あるいはDの誤脱箇所を含む部分のみ『なぐさみ草』の本文を底本とした可能性を想定する必要があるかもしれない。

このほか、語句の脱落と考えられるのが、

E 明星本 下・五十六才 百九十六段

く さて、後に仰られけるハ、

「此相国、北山抄をみて、西宮のせつを

こそしられ(ざり)けれ。けんぞくのあくき・あく

しんををそるゝゆへに、神社にて、ことに

さをゝふべきことはり有」とぞおほせ

られける。

F 明星本 下・九十二ウ 二百四十段

よき女ならんにつけても、

しなくだり、みにくゝ、年もたけなん

男は、かくあやしき身のために、あたら

身をいたづらになさんやほと、人も

こゝろおとりはせられ、わが身ハ、むかひ

たらんも、かげはづかしくおぼえなん。

(いとこそ) あひなからめ。

の二例である(括弧内が脱落部分)。後者は係り結びに関する問題はあるが、強調表現の脱落であり、文脈上のねじれは存在しない。問題は

前者である。東寺の新宮からの帰座に際して、近衛の大将であった源通基が行列の先払いをさせているのを見た土御門太政大臣・源定実が、神社の前での振る舞いとして先払いは不適切であるとたしなめたのであるが、その指摘について通基が後に言及するという話である。流布本や正徹本の本文は「しられさりけれ」であり、「土御門殿は『北山抄』を見たが、『西宮記』はご存知なかった」の意とする。ところが、明星本は、常縁本と同じく「しられけれ」である。そのままに解すれば「土御門殿は『北山抄』を見て『西宮記』の説をお知りになった」、あるいは「土御門殿は『北山抄』を見ないで、『西宮記』の説を御存じであった」とでもなるうか。

『北山抄』には「神社ノ行幸、大嘗会ノ御禊ニ准ズ。但シ、社頭ニ至リテ、警蹕セズ。猶、憚リ有ル可キカ」(巻八)とあるが、『西宮記』の現存本には社頭の警蹕についての言及が見られないため、真偽は未詳と言わざるを得ない。明星本の当該部分が、書写の際に生じた誤脱であるか、それとも底本に由来するものであるのか、さらなる精査が必要である。

このほか、上・三十三才「みやうりにつかはれて、しつかなるいとまなく、一生を(くる)しむるこそをろかなれ」(三十八段)は、書写における単純な誤脱であろう。検討すべきことがらは少なくないが、総じて本文として問題となる箇所は少ないと言える。

本文表記上の細かな差異、とりわけ漢字表記と仮名表記、送り仮名等の違いは枚挙にいとまがない。江戸前期の絵入り写本として、これらの表記の違いは不思議ではないが、むしろ、おそらくは本文の書写時に加えられたであろう補入や見消等において、その分布に偏りが見られる点が特徴的である。

な挿絵にあると言える。成立時期について、『日本書籍協会創立40周年記念目録』で「寛永頃」と記載されるのはこの挿絵の画風が関わっていると考えられるが、山本陽子が指摘する『なぐさみ草』（慶安五年跋）との関連<sup>1</sup>を考慮すれば、その推定成立時期は今少し下らせる必要がある。

本文は烏丸本等の流布本系統と見なされる<sup>2</sup>。上冊と下冊の境界および章段構成も烏丸本と一致する。おおむね丁寧に書写されているものの、大きな脱落が四箇所認められる。烏丸本<sup>3</sup>の本文と対比して以下に示す（\*が明星本の脱落箇所、烏丸本に付した傍線部分が明星本の脱落部分に相当。明星本には句読点を加えた。）

A 明星本 下・十一ウ 百四十一段

あつま

人は、我かたなれと、けにハ、心の色なく、な  
さけをくれ、ひとへにすぐよかなるものなれ  
は、\*人にハたのまるゝそかしとことハられ侍  
しこそ、このひしり、こゑうちゆかみ、あら〜  
しくて、聖教のこまやかなることはりいと  
わきまへすもやと思しに、

烏丸本

ひとへにすぐよかなるものなれば、はじめよりいなといひてや  
みぬ。にぎはひ、ゆたかなれば、人にハたのまるゝぞかし

(下 220-221)

B 明星本 下・五十八ウ 二百三段

主上の御のふ、お

ほかた、世中のさはかしき時ハ、五条の天神にゆきをかけ\*られたりける神なり。

烏丸本

五条の天神に鞆をかけらる。鞍馬にゆぎの明神といふも、鞆かけられたりける神也。(下 296)

C 明星本 下・六十九才 二百七段

所願

はやむ時なし。財は\*もちてかきりなき願にしたかふ事、得へからず。

烏丸本

財はつくる期あり。限りある財をもちてかきりなき願にしたかふ事、得へからず。(下 311)

D 明星本 下・九十才 二百三十八段

一、賢助僧正にともなひて、かちかうすいを見侍しに、\*陣の外まで僧都みえず。法師ともを返してもとめさするに、

烏丸本

加持香水を見侍しに、いまだはてぬほどに、僧正かへりて侍しに、陣の外まで僧都みえず。(下 346)

いずれも、直前の書写箇所の末尾と本来書写されるべき部分の末尾が、同じかもしくは類似した表現である。本文書写の底本において、脱落した箇所が一行に相当し、その前行と紛れたために生じた誤脱と推測される。このうち、Dに関しては、明星本と同じ誤脱が『なぐさみ草』

## 明星大学本『徒然草』と

### その教育実践への応用をめぐる

柴田 雅生

明星大学が所蔵する『徒然草』（以下、明星本と称する）は、『日本書籍協会創立40周年記念目録』（平成十六年）等によってその存在が知られていた写本であるが、詳細な紹介は今回が初めてである。本節では、本書の書誌と本文の特徴およびその教育実践への応用について述べることにする。

#### 書誌

紙本著色 上・下 計二冊

大きさ 上・下とも 縦一六・九糎 横一一・九糎

外題 上「つれく草」

下「つれく草」

内題 なし

奥書 なし

表紙 黄土色地金糸緞子装（但し、下冊裏表紙のみ改装）

見返 型押絹目模様入の金箔貼

装丁 胡蝶装

挿絵 上冊八図、下冊五図の計十三図（すべて半丁分の大きさ）

時代 江戸時代前期

朱漆塗箱入（蓋表に「つれく草 二冊」との墨書あり）

上冊・下冊とも、冒頭一丁分の遊び紙をはきんで本文がはじまる。末尾は、上冊の最終丁まで本文があり、下冊は十一丁分の白紙を残す。上冊においては本文量に合わせて一丁分を追加し、料紙の枚数を調整していると考えられるのに対して、下冊には少なくとも調整の跡は認めがたい。

本文書写においては、半丁あたり九行を基本としている。原則として、章段ごとに行をかえ、挿絵がある場合は章段本文の末尾に相当する半丁を散らし書きで調整して挿絵を挿入し、次の半丁から後続の章段がはじまることを方針としていると推定される。ただ、いつも散らし書きで対応するのではなく、行の上下をいっばいに使う通常の書きのまま紙面の後半を空行にする場合もある（絵一・絵七・絵八・絵十二の各前半丁）。九行に記しながら末尾の一行の行頭を下げている例（絵四の前半丁）もあることから、これらの空行は何らかの理由で散らし書きにしないで書写したのをそのままにしたのであろう。

右に推定した方針には若干の例外がある。上冊においては、絵三・絵四が対象とする章段の直後ではなく、前後に二丁分または三丁分ずれている。下冊は、絵九と絵十の貼り込み位置を取り違えている。また、絵十一（三十三ウ）が対象章段の次段の本文の間に挟まれている。ただ、これは、本文書写の際に、百七十三段の挿絵のための空白箇所を失念し、続けて次段である百七十四段を書写したものである。下冊の後半六十二丁以降になると、挿絵を挿入する予定であったと思われる空白の半丁が四箇所見られるようになる。空白の半丁の前後は前述の作成方針に沿っているため、おそらくは直前の章段の挿絵が差し込まれる予定であった可能性が高い。

明星本の最大の特徴は、色数が少ないながらも繊細に描かれる古雅

明星大学所蔵『ふんしやう』絵巻



明星大学所蔵『ふんしやう』絵巻外観



明星大学所蔵『ふんしやう』巻上絵一



『ふんしやう』巻中絵五



『ふんしやう』巻上絵四



『ふんしやう』巻上絵二



明星大学所蔵『ふんしやう』巻下絵一

明星大学所蔵『一目玉銚』・明星大学所蔵『新曲』



明星大学所蔵『一目玉銚』表紙



『一目玉銚』表紙と見開き



『一目玉銚』巻1 第2丁裏～3丁表



『一目玉銚』巻2 1丁表



明星大学所蔵『新曲』外観



明星大学所蔵『新曲』下巻より



明星大学所蔵『新曲』上巻より

明星大学所蔵『徒然草』



明星大学所蔵『徒然草』外観



明星大学所蔵『徒然草』表紙と見開き



明星大学所蔵『徒然草』下冊第一百八十段



明星大学所蔵『徒然草』上冊第一段



明星大学所蔵『徒然草』下冊第三百七段

MEISEI UNIVERSITY

# 絵本・絵巻の世界

2011年3月更新

明星大学所蔵の絵本・絵巻と本プロジェクトについて

	絵本 平家物語
	絵巻 北野通夜物語
	絵巻 十番切
	絵巻 文正草子
	絵本 新曲
	絵本 徒然草
	地誌 一目玉鉾

使い方  
コピーライト  
お問い合わせ  
リンク集  
謝辞

MEISEI UNIVERSITY

「絵本・絵巻の世界」トップページ

MEISEI UNIVERSITY

## 徒然草

明星大学所蔵「徒然草」絵本について

- 外観
- コラム
- 挿絵一覧
- 画像検索と翻刻

MEISEI UNIVERSITY

「徒然草」トップページ

MEISEI UNIVERSITY

## 一目玉鉾

明星大学所蔵「一目玉鉾」について

- 外観
- コラム
- 画像検索と翻刻

MEISEI UNIVERSITY

「一目玉鉾」トップページ

目次

カラーページ『トップページ』図版

カラーページ『徒然草』図版

カラーページ『一目玉鉾』・『新曲』図版

カラーページ『ふんしやう』図版

明星大学本『徒然草』とその教育実践への応用をめぐって

明星大学本『徒然草』挿絵について

明星大学本『ふんしやう』『新曲』について

明星大学本『新曲』の挿絵について

明星大学本『ふんしやう』絵巻の挿絵について

明星大学蔵『一目玉鉾』WEB公開に伴う解説・コラム・翻刻について

『絵本・絵巻の世界』のWEB公開について

明星大学平成二十二年度特別研究費（共同研究助成費）

「明星大学蔵絵入り和本の基礎的研究とWEB公開、教育実践への応用」について

柴田雅生

山本陽子

柴田雅生

山本陽子

山本陽子

勝又基

矢吹道郎

明星大学平成二十二年度

特別研究費（共同研究助成費）研究成果報告書

## 明星大学蔵絵入り和本の基礎的研究と

### WEB公開、教育実践への応用

平成二十三年三月二日

柴田雅生・山本陽子

勝又 基・矢吹道郎